

第二章 考古学からみた出石



考古学は文字で書かれた書物の残っていない時代を、地中に残された物の中から、掘り起こし、組み立て、人間を探究する学問といえる。その研究方法は、地中に残された遺構・遺物について最も有効性を發揮する。

縄文時代の人々が生活した家の柱や、茅葺きの屋根は、短い期間に朽ちてしまいが、大地に掘り込んだ円形の住居穴や柱穴、石囲いの炉、そして、生活に使った土器は、割れることはあっても残っていくだろう。また食事にとった貝や獣の骨は他の物と共にゴミ捨て場へ捨てられ、貝塚を形成することになる。しかし、それらからは縄文人の住居や、食生活は理解できたとしても、彼らが何を考え、どう行動したかは全く知ることができない。

そこで、残ることのない人間の行為を、残ったものの中から解釈し、復原しようと土中に残ったわずかな痕跡(遺構・遺物)に年代を与え、型式化、類型化するという方法を用いて、過去の歴史を解こうとするのである。

◇

宮内周辺の微高地上に人々が住み始めるのは、縄文時代の後期、今から三〇〇〇年程前であろうか、このころの人々の生活の跡は、不明な点が多く、今後の新しい発見に待たねばならないが、但馬における縄文時代の遺跡・遺物を見ると、かなり高い文化が営まれていたと理解される。

◇

自然に生息する動物や植生する植物に依存する、食糧採集生活の中に、縄文土器を使って食物を煮たり、蒸して食べる生活が開始された。

◇

一九七二年(昭和四七)冬、宮内字黒田において発見された弥生土器は、採集者に驚きを与えた。その

土器は、口縁部がやや外に開き、口唇部に刻み目、頸部に沈線をもつ簡素なカメの破片であった。

大陸から伝播した稲作農耕文化は九州に上陸したのち、弥生時代最古の土器「板付式土器」と共に、日本列島を東へと進むが、黒田出土の土器は、その板付式土器のカメと非常によく似ていることから、弥生時代の始め、稲作農耕の技術や文化が、日本海沿岸に沿って出石にも伝えられた事を、この土器片から知ることができた。

この新しい文化は、それまでの、食物を自然に依存する社会から、自らの手で食物を生産する農耕社会へと大きく転換しただけでなく、田の水や土地をめぐる集団と集団との争い、人間と人間との間にも争いが生じる時代を迎えることとなった。

◇

◇

町教育委員会の前庭や、本覚寺境内に出土地不明の長持型石棺の一部が保存されている。この石棺は全国的に見て、巨大な前方後円墳の内部主体として用いられている場合が多く、この中に葬られた人物はこの地域の絶対的な権力者と推測することができる。西暦五世紀中ごろのことであろうか。

同じころ、尾根上に立地する田多地三号墳からは、一墳丘の中に、組み合わせ式箱形石棺、石室様石棺、割竹形木棺、組み合わせ式木棺等が一三基も発掘された。副葬品には、内行花文鏡・鉄鍬・ナタ・刀子が出土。埋葬形式の多様さと副葬品の少なさは前者と比較して、墳墓の中にも違いが認められる。

弥生時代に始まる食糧生産経済は、古墳時代に入ると、階級社会を育て、人と人の中に支配、被支配者を生むと共に、河川や限られた地域を中心にして政治集団を形造り、統一国家へと発展を始める。

第一節 原始時代の出石

人類の発生

東京大学人類学教室の鈴木尚博士はその著書『化石サルから日本人まで』の中で、人類は猿人、原人、旧人、新人の順で化石のサルから現代人へと進化したと述べ、人類進化の様子を二四時間に割り振って説明している。それによれば、第三紀、漸新生のパラピテクスが出現したときを午前〇時とすると、午前、午後にはゆっくりとした足どりで化石のサルは進化を続け、午後一〇時四〇分ごろ、サルは直立し、文化をもつ最初の人類、猿人が現れ、午後一時半ごろ原人が現れ、ネアンデルタール人類は一時五八分に、五九分には新人、さらに最後の一分の間に、後期旧石器時代から新石器時代を経て金属時代に入り、現代人の祖型、例えば弥生時代人が午前〇時よりわずかに五秒前に生まれたことになる。とされている。いかに現代人にいたる人類の進化がゆっくりとした足どりであったことか、また、人類の進化からみれば、ほんの何秒か前にわれわれの祖先が誕生したかが分かる。

出石町住民第一

号は縄文人か

このような人類の足跡をたどって我が町の歴史をながめると、紀元前一万年前の石器の号を使用する旧石器時代はなく、今のところ、縄文時代じよもんまでしか確実にたどることができない。出石町に最初の人間が住みついたといえるのは、今のところ縄文時代である。今から三〇〇〇年程

前であろうか、この出石に生活を始めた人々の行動と思考の結果を、遺跡、遺物に探り、但馬の、あるいは日本の歴史の中に位置づけ、その中で出石町の歴史を現在の考古学の研究方法を用いて書き綴っていききたい。しかし、歴史は常に書き換えられるものであり、今後新たな発見によってさらに時代も古く、内容も豊かになっていくものと思われる。

旧石器時代

日本の旧石器時代は、大正年間に大阪府国府遺跡において、縄文時代の文化層の下に石器の相みを出す文化層が確認され、旧石器時代探求への試みがなされたにもかかわらず、戦後の相みを出す文化層が確認されてきた。それは一九四七年（昭和二二）、群馬県赤城山麓一帯の遺跡調査を続けていた相沢が笠懸村岩宿の切り通しの関東ローム層中より石器を発見したことである。今まで、関東ローム層は人類の生息する以前に噴火した火山灰が厚く堆積した地層といわれ、この地層より人類が明らかに作った石器の発見は、従来否定され続けてきた旧石器時代の存在を証明する衝撃的な発見であった。これ以後、旧石器時代の遺跡の追求へと研究者をかりたて、現在では、数千の遺跡が発見、発掘され新しい研究が展開されている。

石器の編年

と遺跡

石器は形や機能から、現在ではだいたいにおいて敲打器（握槌）、刃器、尖頭器、細石器の順に変化すると考えられている。最古の石器、敲打器を使用した前期旧石器時代には明石原人が生活していた可能性も含まれるが、今のところ、この時代に位置する明確な石器の出土例は兵庫県では、日高町神鍋遺跡出土の握槌といわれている例のみである。

後期旧石器時代（第四紀洪積世）にはナイフ形石器と呼ばれる石器がある。形は半月形で、弧状の一边に鋭

利な刃をもっていることから刃器と総称されている。この石器は関西では、サヌカイトを原石とし、これから肉厚の石片をはぎ取り、そして、その剥片はぐみにシカの角などで押圧を加えて、刃を施すことから瀬戸内技法といわれ、大阪府国府遺跡の名をとって国府形ナイフと名付けられている。

このナイフ形石器が兵庫県下でも、瀬戸内海に近い地域から出土しているが、但馬では神鍋遺跡、関宮町別宮家野遺跡などで見付かっている。続いて、小さな石片を骨や木に埋め込み合わせ式の石器である細石刃が、神鍋遺跡・関宮町杉ヶ沢遺跡において採集されている。

旧石器時代も終末になると、但馬でも尖頭器をもつ文化が訪れる。その代表は有舌尖頭器と呼ぶ柳葉形の

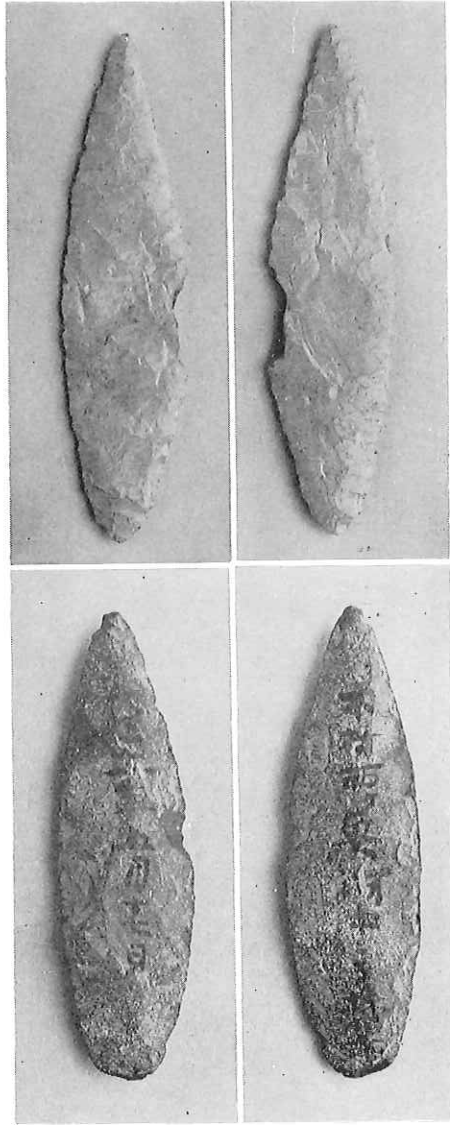


写真 14 有舌尖頭器 (上)養父町石ヶ堂出土 (下)但東町西ヶ奥出土

もので投げ槍として使われたと考えられている。養父町石ヶ堂遺跡（写真14―上）・但東町西ヶ奥遺跡（写真14―下）・関宮町杉ヶ沢第一三地点遺跡・日高町神鍋遺跡など五例あり、丹後半島においても峰山町途中ヶ丘遺跡・久美浜町内・舞鶴市小橋でも出土している。これらの出土例から但馬・丹後に有舌尖頭器をもつ文化があったことが理解される。

縄文時代へ

の胎動

旧石器時代も終わりに近くなると、地球全体が暖かくなり、今まで広大な地域を覆っていた氷河が後退して、ヨーロッパのステップやツンドラが湿潤な森林地帯となり、地中海沿岸や小アジアの草原は乾燥した砂漠に変わっていった。このような環境の変化が新たな時代を生み出す背景となる。磨製石器をもち、農耕、牧畜を始める時代、すなわち、新石器時代の出現である。日本では農耕は始めているが、土器をもつ少し変わった文化の形をとる新石器時代、つまり、縄文時代の開始を迎える。

第二節 縄文時代の出石

縄文時代の 縄文時代は狩猟や漁撈を中心とした食物採集経済の時代といわれている。まだ日本では稲作

但馬 農耕を知らず、自然に生息する動物を捕獲したり、植物を採集栽培する自然に依存する生活

を営んでいた時代である。但馬の縄文土器は、非常に熱心な地元の研究者により、長年にわたり採集されたものが多い。その膨大な資料の中から、約一万年前から紀元前二〜三世紀までの但馬の縄文土器の流れを概観しながら、出石町の縄文文化成立の様子を探っていきたい。

縄文時代草

草創期の土器には隆起線文、あるいは豆粒文の土器群と、爪形文・押し型文を文様とする土器群とに大きく分けられる。後者の土器群は、さらに神宮寺式（大阪府中河内郡神宮寺遺跡）と、

創期

大川式（奈良県山辺郡大川遺跡）押し型文土器とに分類されている。これらの土器は、縦刻み原体を器面上で回

転させて文様を付す押し型文土器で、凹状押し型文（ネガティブ）と総称される楕円文・特殊菱形文・斜格子

目文などの文様をもつ尖底土器である。最近の研究によって、帯状の山形文が神宮寺、大川式押し型文より

も古い段階の押し型文土器とされ、神鍋遺跡第一〇地点↓神宮寺式↓大川式へと変遷する見解が発表された。

また、この大川式は縄文を器面に施し、中部地方の樋沢式にも似ていることから、中部地方の文化の流入も

十分考えられる。

代表的な草創期後半の遺跡として、日高町神鍋遺跡第一〇地点・関宮町別宮家野遺跡・杉ヶ沢遺跡第二九地点・葛畑坂根遺跡・八木西宮遺跡が該当する。共伴する遺物としては、局部磨製の石鏃、有舌尖頭器が出土している。

縄文時代の

早期の前半は、草創期後半から引き続いて出土する回転押し型文を中心としている。この土

早期

器は草創期の凹状の押し型文に対し、凸状の押し型文を施すもので、山形文・格子目文・楕円文が施文される。その他に格子目文・変形格子目文・平行線文・複合鋸歯文・波状文などがある。押し型文も終わりに近くなると、器面全面にわたり、粒の大きい楕円を施文する土器に代わり、和歌山県田辺市高山寺貝塚を標式遺跡とする高山寺式が現れる。この器形は口縁がラッパ状にひらく尖底の土器である。遺跡としては、神鍋遺跡・山ノ宮遺跡（日高町）、杉ヶ沢遺跡第一地点・同一六地点・八木西宮遺跡（大屋町）、播磨では神崎郡神崎町福本遺跡、畿内では、滋賀県蒲生郡安土遺跡からも見付かっており、この時期には近畿全域が同一の回転押し型文を使用していた。後述する石山貝塚より、口縁部内外面に大きな山形押し型文を横位、その下方を刻み目突帯や複合鋸歯文で飾った穂谷式が出土する。

早期後半になると、器面の表と裏に条痕を施した条痕文土器が出現する。植物の茎や二枚貝の縁などで器面をこすり文様とするもので、土器形式として、畿内では、滋賀県大津市石山貝塚を標式遺跡とし、石山Ⅱ～Ⅵまで形式分類がされている。形式的にみて、東海地方との強い関係がうかがえる。しかしながら、近畿北部、京都府宮ノ下遺跡においては、下層から「外面に無節または単節縄文を施し、内面を植物茎による条

痕で仕上げた平底の織維土器(宮ノ下Ⅰ式)が出土し、土層から内外面に単節縄文を施した、恐らく尖底の織維土器(宮ノ下Ⅱ式)、「縄文時代」日本の考古学Ⅱ」が出土しており、裏日本的な様相をもつもので、石山貝塚とは様子を異にしている。ここに、裏日本を舞台として展開した文化の存在が知られることになった。

この時代に伴う遺物として、動物の皮はぎなどに使用した石匙^{せき}や、多種多様の形態をもつ石鏃がある。石山式土器が出土する遺物としては、関宮町ハチ高原遺跡第一地点・杉ヶ沢遺跡第七地点・同一〇地点・外野^の野遺跡・村岡町田作遺跡^{たき}などがあげられる。

縄文時代の 前期の土器は、植物の茎などで表面を磨いた条痕文を残し、半截竹管^{はんせつ}による爪形文(Ⅰ式)、

羽状縄文(Ⅱ式)、特殊突帯文(Ⅲ式)で飾る土器が出現する。そして、条痕文を縄文に置き換える京都市北白川小倉町遺跡を標式遺跡とする北白川下層式土器が出現する。この土器は二枚貝の条痕を施すなど、瀬戸内地方と強い共通性をもっている。

一方、瀬戸内地方には、羽島式と呼ばれる内外面に条痕をもち、貝殻^{かい}捺捺^{なつ}文、刺突文、爪形状の羽状縄文、刺突文が施文される土器が分布し、北白川下層式に近いといわれている。この羽島下層式が岡山県、鳥取県に分布しており、但馬では関宮町尾崎^{おき}文ヶ谷遺跡で見付かっている。形式的には羽島下層Ⅱ式といわれている。北白川下層Ⅰ式は関宮町杉ヶ沢遺跡一九地点・ハチ高原遺跡第七地点・吉井円光寺林遺跡・西野遺跡

・八木西宮遺跡、Ⅱ式には杉ヶ沢遺跡一・二・七・九・一〇・二九・三〇地点・八木西宮遺跡があげられる。続いて、前期末になると北白川下層Ⅲ式特殊突帯文がさらに発達する神戸市大蔵山^{おおくら}遺跡を標式とする大蔵山式土器が現れる。この時期の遺跡としては、岡山理科大学の鎌木義昌教授によって、突帯と爪形文を並

べたやや薄手の土器で兎和野式土器と命名された土器が出土した村岡町兎和野遺跡がある。

縄文時代の

中期は、畿内全域にわたり前期と同じく撚糸文を地文とする土器群で総称される。大蔵山式

中期

の細密な口縁部の施文が粗くなって、岡山県倉敷市船元貝塚を指標とする船元式土器や、同

じく岡山県船穂町里木貝塚を指標とする里木式土器が誕生する。これらの土器群は、畿内の粟津式などに影響を与えていること、京都府平遺跡でも、この土器が出土している例からみて、中期前半には畿内、瀬戸内、但馬を含む近畿北部において、また地方色をもつ段階にまで至っていないことが明らかである。ただ、杉ヶ沢遺跡で畿内においても出土例をみる北陸地方の新崎式、関東地方の五領ヶ台式に類似した土器が共伴する事実は、東日本からの影響を考えていかねばならない。

中期後半には、キャリパー形の深鉢が盛行し、縄文の上に大きく弧を描いた半截竹管文が主になる。船元式の遺跡としては、杉ヶ沢遺跡第一〇・二九地点がある。里木式は、口縁部と胴部とをはっきりと区別しており、口縁部は丸く外反するもの、あるいは突起を直立させるものなどがある。地文には硬く粗い繊維を用い、縦長の撚糸を使用している。幅の広い爪形文で口縁端面、内面や頸部を飾る土器が、関宮町外野柳遺跡・杉ヶ沢遺跡二九地点にある。

巨視的にみると、部分的には影響を受けながらも、東西日本に分かれた土器文化をもっていたが、中期後半を境に、地方色の強い土器が出土するようになる。後半の土器形式として、里木Ⅲ式、あるいは福田C式土器が分布するようになる。遺跡としては、杉ヶ沢遺跡第一七地点がある。

縄文時代の

後期になると、土器の器面に施文した縄文を部分的に消して、裝飾化する磨消縄文の土器が

後期

使用される。この特色をもつ土器として、岡山県玉島市中津貝塚を指標とする中津式土器が

出現する。これは近畿地方全域に分布し、器形は深鉢を主とするものである。また、福田Ⅱ式土器も同様である。

但馬においては、豊岡市中谷貝塚・荒原遺跡・円山川河床・女代神社遺跡・当町宮内採集土器といった平地に立地する遺跡と、神鍋遺跡・山ノ宮遺跡・関宮町小路頭オノ木遺跡などの高所の高原地帯に立地する遺跡も現れる。遺跡としては、中谷貝塚が有名である。旧新田村中谷の海拔一〇メートルの沖積地に立地する遺跡で、約一メートル程の貝層からカワニナ・レイシ・ハイガイ・アカガイ・サルボウ・オキシジミ・カガミガイ・マガキ・ハマグリ・シオフキ・セタシジミなどの貝類、鹿、猪などの骨、土錘、石匙などの石器が出土しており、豊岡入江湖が、この貝の種類から、きすい性の湖（真水と塩水の混ざった湖）であったことが分かる。

続いて、前半の中でも、浜坂町池ヶ平遺跡出土の太い沈線による渦巻き文土器は、池ヶ平式土器と命名され、現在、但馬特有の土器であり、誰もが注目するところである。日高町伊府遺跡で、池ヶ平式に類似している土器が発掘され、類例が次第に増しつつある。後期後半になるとよく分からない。ヘナタリ類の巻き貝を引きずった凹線文を口縁部文様帯、頸部屈曲部に配し、要所に巻き貝の先端を押し出した点文を付す、元住吉Ⅱ式、あるいは宮滝式などが出現する。

縄文海進に

縄文時代の気候はビュルム氷期（第四氷期）を過ぎて以後、次第に暖かくなり、旧石器時代か

よる変化

ら縄文時代への移行の背景には、全世界的な規模の気候変化に伴う自然環境の変化があった。

具体的には、縄文時代早期後半から前期はじめの優温期に入ると、氷河がとけて海面が上昇し、日本列島を取り巻く海岸線が陸地の方へ移動する有楽町（縄文）海進が始まった。この海進によって関東平野においては、海岸線が現在より約五〇キロメートルも内陸部に入った位置にあり、縄文時代の早期や前期の古い貝塚程、現在の海岸線より遠く離れるという奇妙な現象が生まれた。

但馬では、現在の標高一〇メートルくらいまで海面が上がったとされ、豊岡は水中に没し、当町では町中は無論のこと、鍛冶屋・細見・荒木・鳥居・森井・丸中・三木・片間・安良・田多地・小野・宮内の集落あたりまで、波が押し寄せていただろう。その時代が過ぎると海面は下がり、徐々に現在の海岸線へと海が後退し、そのあと河川によって土砂が運ばれ、沖積平野が形成されていく。そのことはとりもなおさず、海浜動物、内湾性の魚貝類を食糧とする縄文人の村落が営まれるようになったと思われる。

それでは、高原地帯に立地する遺跡はどうであろうか。こちらの方は海辺や山地に住む、すべての人々を包む自然環境の問題である。日本列島の自然環境は、年間の温度差によって針葉樹林帯、落葉広葉樹林帯、照葉樹林帯の三つの森林帯に分けられ、その森林帯によって樹木の種類が異なり当然動植物を含む植生（自然景観）も異なる。それは森林を媒体としては、くまされる文化にも、三者三様の特色をもつことになる。

兵庫県の場合は、標高五〇〇メートルまでの低地に照葉樹林が広がり、ブナ林は日本海側で標高五〇〇メートル以上に分布するとされ、但馬では但馬山地から波賀町の音水（おんすい）、赤西（三室山山系）にかけて、ブナ林帯が分布する。そうすると、標高五〇〇メートル以上の関宮町ハチ高原遺跡・別宮家野遺跡・外野野遺跡・外野柳遺跡・杉ヶ沢遺跡・村岡町タツケ平遺跡・日高町神鍋遺跡・山ノ宮遺跡などはブナ林に、関宮町小路



写真 15 縄文時代の石斧（出石神社出土）

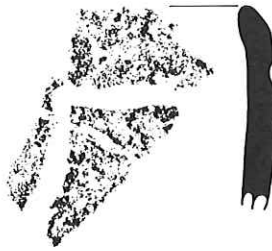


図 18 縄文土器(1/2)

頭才ノ木遺跡・吉井円光寺林遺跡・尾崎丈ヶ谷遺跡・三宅早詰遺跡・八木西宮遺跡・浜坂町池ヶ平遺跡などは、落葉樹林の中に生活の場を求めたことになるが、実際には、ブナ林帯の生活と照葉樹林帯の生活とが、生活面から分けられるものではなく、ブナ林も照葉樹林も混在する生活環境こそ、山岳地帯の文化と考えられる。

出石町の縄文時代の遺跡は発見されて文遺跡 いない。ただ採集されたものに石斧ふ

(写真15)と土器片(図18)がある。これらは宮内にある出石神社境内とその付近から出土したもので、地形から判断して、出石神社付近に縄文時代の遺跡があるものと考えてよいだろう。採集された土器は、後期に属する中津式に編年されるもので、磨消し縄文

を残す口縁部のみであるけれども、後期には縄文人が出石にも住んでいたと思われる。路傍で採集された一片の土器でも、かつて人間が住み、生活を営んでいた痕跡を明らかにする貴重な歴史資料といえる。ただ、出石町における縄文時代の自然環境は、あまり人間が住む景観としてはよいとは思えない。それは山と入江湖の時代と思われるからである。

特に、神鍋山や氷ノ山のように高所に高原地帯をもつ山はなく、むしろ平地から急にそびえ立つ形の山が多く、豊岡入江湖が谷深くまで入り込み前述した現在の海拔一〇メートル以下の地域は、当然水中に没していたと想定され、むしろ豊岡入江湖の水が徐々に海へ後退する中で、山が平地に接する丘陵地や微高地上に人間が住みつき始めたのではなからうか。例えば、中谷貝塚などはその好例である。

まとめてみれば、豊岡入江湖の海退化が進む縄文時代後期に、海拔一〇メートル付近の丘陵や微高地上に縄文人が生活を始めたらしい。その生活は、豊富な海や川に住む魚貝類、山に住む動物や食用植物の採取によっていたのであろう。

縄文時代の

縄文時代も終わりに近づく、亀岡式土器という黒色の華麗な土器が東日本を中心に広く分

終末

布する。それに対し、西日本においては縄文を文様としない突帯文土器が分布する。この突

帯文土器は、口縁直下などに突帯をはりつけた土器で、深鉢形土器と浅鉢形土器とが多く、但馬では、日高町^{（たか）}布ヶ森遺跡・焼ヶ辻遺跡・水上^{（みづかみ）}遺跡といった遺跡から発見されている。これらの土器の中に弥生土器が相伴している。

現在、弥生時代を定義づける稲作農耕の採用の時期が問題となっている。大陸からの稲作を中心とする農

第2節 縄文時代の出石

耕文化の流入、例えば朝鮮半島からの人の渡来により、今までの生活は根底から覆った。その大きな変化がいつ起こったのか、どのような形で日本列島にとけ込んでいったのか、大きな問題を抱えている。

第三節 弥生時代の出石

稲作農耕が 弥生時代は日本列島に稲作農耕が伝播、定着、開花した時代といえる。今までの自然の動植

花開く 物に依存する不安定な生活から、稲を植え、育て、そして収穫するという人間自らが創造す

る生活を始めるようになる。いいかえれば、食糧採集経済から食糧生産経済へと移行する時代を迎えた。

当時の日本は、突帯文土器を使用する西日本地方と亀ヶ岡式土器を使用する東日本とに大きく分かれ、まだ稲作農耕を知らない縄文人の社会であった。その中に、紀元前二〜三世紀ごろ農業用磨製石斧（太型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧）、収穫用の石器（石包丁、石鎌）、木器、骨器の加工技術、鉄器の鍛造技術、青銅器の鑄造技術、紡織技術、貯蔵用穴倉、高床倉庫、巨石の運搬技術といったさまざまな体系化された技術を携えた大陸からの人々が、まったく新しい生活を始めた。そして、周囲の縄文人と接触を深め融合する過程で、新しい文化を伝えた。それは水稲耕作を主とする農耕社会の成立であり、その社会のもつ自立性ゆえに、小さな多くのムラが次第に大きな一つのクニへと発展する階級社会成立への幕開きでもあった。

弥生時代の年代は、中国や朝鮮から伝来した土器、鏡、剣、鉾、戈、貨泉、磨製石剣、支石墓などの比較研究、『漢書地理志』、『後漢書』東夷伝、『魏志』倭人伝といった書物に書かれた日本の記事をとおして、推

理する方法がとられ、現在、西暦紀元元年を半ばとして、西暦前二、三〇〇年から西暦三〇〇年ごろまでの五〇〇～六〇〇年間を弥生時代とする。

そして、その弥生時代を大きく前期・中期・後期とに分け、畿内では、前期Ⅱ北九州に中心をもった遠賀川式土器の波及、中期Ⅱ畿内に生まれた櫛描き文様を器面に描く、櫛描き文土器の畿内からの拡散、後期Ⅱ遺跡から石器が消え、鉄器が普及する時期にあたるとした。弥生時代の終わりは、西暦三〇〇年ごろ、突如として出現する古墳の築造をもって迎える。けれども、この終末と開始の時期をめぐる、いろいろの説があり固定していない。

一八八四年(明治一七)、東京都文京区弥生町より出土した壺つぼにつけられた名が弥生土器である。この土器がそのころ、薄手式、厚手式と呼ばれた縄文土器とは明らかに違うことから、一つの時代を区分する時代名として、弥生土器を使う時代、すなわち弥生時代と呼ばれることとなった。その弥生土器を分析、研究して考古学の物差しとする土器型式の編年が、全国各地に組み立てられている。しかしながら但馬にはまだ遺跡遺物が質・量共に不足しており、編年表を作成するまでにいたっておらず、畿内の土器型式の編年を参考にすることにしたい。畿内における編年は、前期を第Ⅰ様式、中期を第Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ様式、後期を第Ⅴ様式としている。

弥生土器は、初めより壺、カメ、鉢のセットで使用されており、壺は主に貯蔵用に、カメは煮炊きに、鉢は盛り付けなどに用いられ、後になると、高杯たかぐさや器台といった供え物をする供献用の土器が使用される。この壺、カメ、鉢、高杯といった食器の組み合わせは、縄文時代の深鉢を中心とする土器の組み合わせと根本

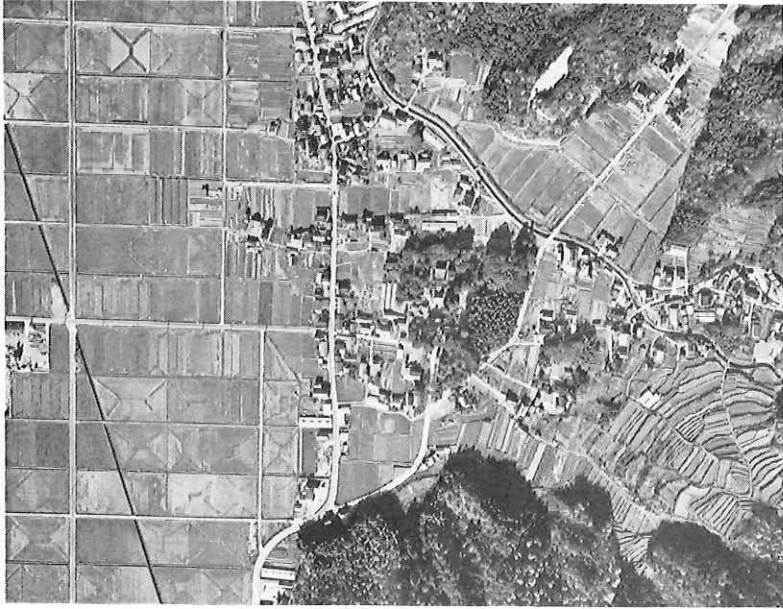


写真 16 出石神社遺跡の全景

的に違い食生活の多様性を示すものだろう。

弥生文化の

縄文時代晩期、大陸から渡っ

波及

て来た人々の影響を受けた弥

生時代最古の土器が、遠賀川式土器と総称される板付式土器である。この土器は、縄文時代晩期の夜臼式土器と共伴して出土する例が、北九州の遺跡から数多く発見され、縄文文化の伝統の上に弥生文化が成立したことを証明している。その遠賀川式土器は、北九州から伊勢湾に至るまで形、文様、器種の組み合わせなど、土器の基本的な要素をくずすことなく分布している。

その伝わるコースは、瀬戸内海を経て畿内、伊勢湾へと東進するコースと、北九州から日本海沿岸を東進し、北但馬、丹後半島にまで達するコースに分けて考えることができ、我が町の出石神社遺跡(写真16)は、その代表的

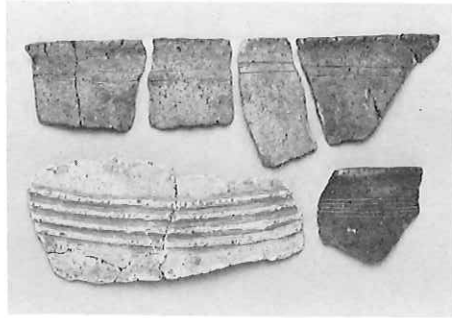


写真 17 前期の弥生土器(宮内区黒田出土)

施す図19—4の壺破片が採集され、これらから、前期の中、新段階に既に北但馬には弥生文化が伝わっている事実が確認された。このことは従来、丹後半島には、新段階にならないと農耕文化が伝わらないとされていた説を中段階にまで押し上げることになった。

我が出石町に移り住んだ最初の弥生人は、出石神社周辺の高台に居をかまえ、沖積化の進む平野の湿潤地に種をまき、育て、収穫する生活を始めた。しかし、このころの水田は、地下水位が高いため常に水田が冠

な重要遺跡である。この遺跡は、一九七二年(昭和四七)、出石神社に近い宮内字黒田で、農業基盤整備事業中に発見された。そのため遺構が確認できないが、写真17、図19に示した外反する口縁部に刻み目をもち、二条の沈線をもつ図19—2・3、多条沈線の間列点文を刺突する図19—1のカメや、三条の刻み目突帯の下部に、貝殻の腹縁による綾杉文を

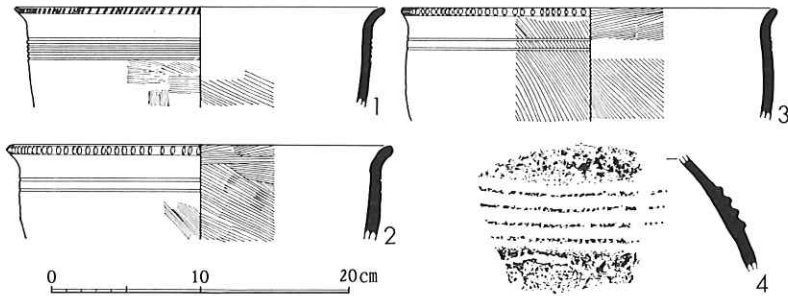


図 19 町内出土の弥生土器(前期)

第2章 考古学からみた出石

水の状態にあり、土壌は栄養分が足らず、収穫量もそれほど多くはなかったであろう。そこで、人々は長い年月と叡知を傾けて但馬の地に適した稲の品種改良と水田開拓を始めたことであろう。

弥生時代

この時期は、前期の弥生文化が各地に根を

中期

下ろし定着する時期で、紀元前一世紀ごろ

に始まるといわれ、土器では表面に櫛描き文を描く第Ⅱ、Ⅲ様式(土巴)と凹線文を描く第Ⅲ様式(新)、第Ⅳ様式とが出現する。

この中期の但馬の代表的遺跡は養父町餅耕地ササ遺跡(写真18)で、壺には櫛状工具による櫛描き文、高杯には凹線文が施文されている。出石神社遺跡からは磨製の石斧(写真19-1~4)・石槍(写真19-5)・土器(図20-1~4)、小野小学校裏山から採集された長頸の壺形土器は把手をつけ、胴部中央と頸部近くに、貝殻の腹縁で綾杉状に文様化したもので、底部には穴をあけている(図20-5)。上坂遺跡からは磨製石斧が出土している。また、日本海



写真 18 中期の弥生土器 (高杯と壺)養父町ササ遺跡出土

跡、関宮町三宅前川向遺跡等があり、遺跡数の増加が見られる。次に但馬と畿内との関係を考えてみよう。それは、但馬が畿内の文化とかなり密接な関係をもっていたと思われる。例えば、畿内の文化を象徴する銅鐸たたくがある。この銅鐸には同じ鋳型で製造した同範銅鐸はんが畿内を中心にして分布し、今日では新たに発見される鋳型の出土例から、その鋳型で鋳造した例が各地で見られている。

但馬における例として、豊岡市気比鷲崎の岩窟内くつより出土し

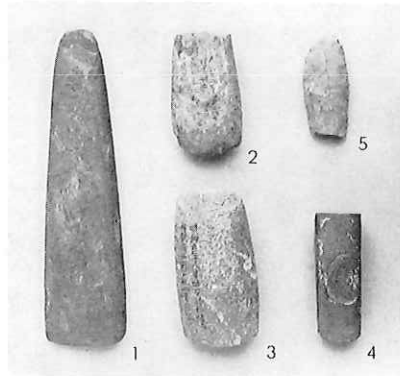


写真 19 石斧と石槍 (出石神社出土)
1~3. 大型始刃石斧 4. 扁平片刃石斧 5. 石槍

に面する遺跡としては、香住町無南むな垣小泉遺跡(環状石斧)、円山川水系の豊岡市女代神社遺跡、日高町久田谷遺跡・祢布ヶ森東遺跡・同西遺跡、八鹿町米里遺

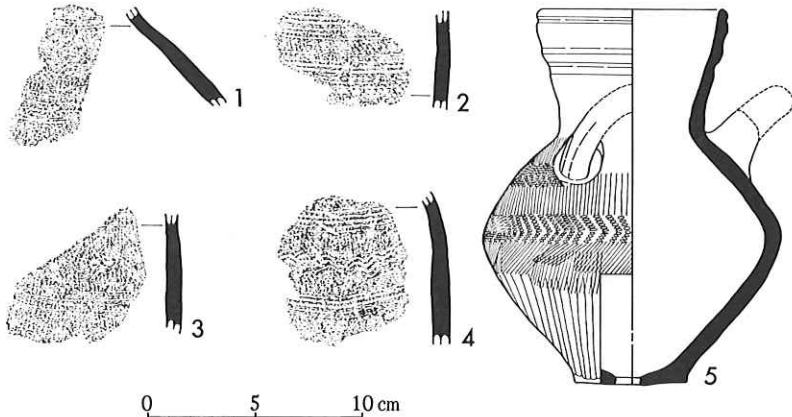


図 20 町内出土の弥生土器(中期)

第2章 考古学からみた出石

た、四個の銅鐸（外縁付き鈕式）は有名である（写真20）。この四例の内、三号銅鐸は大阪府東大阪市東奈良遺跡出土の鑄型とびつたり一致し、東奈良遺跡付近で鑄造された銅鐸が但馬まで運ばれてきたことが分かった。また気比四号銅鐸は大阪府堺市陶器銅鐸、明治大学蔵一号銅鐸と同范であり、これも、畿内の銅鐸鑄造所か

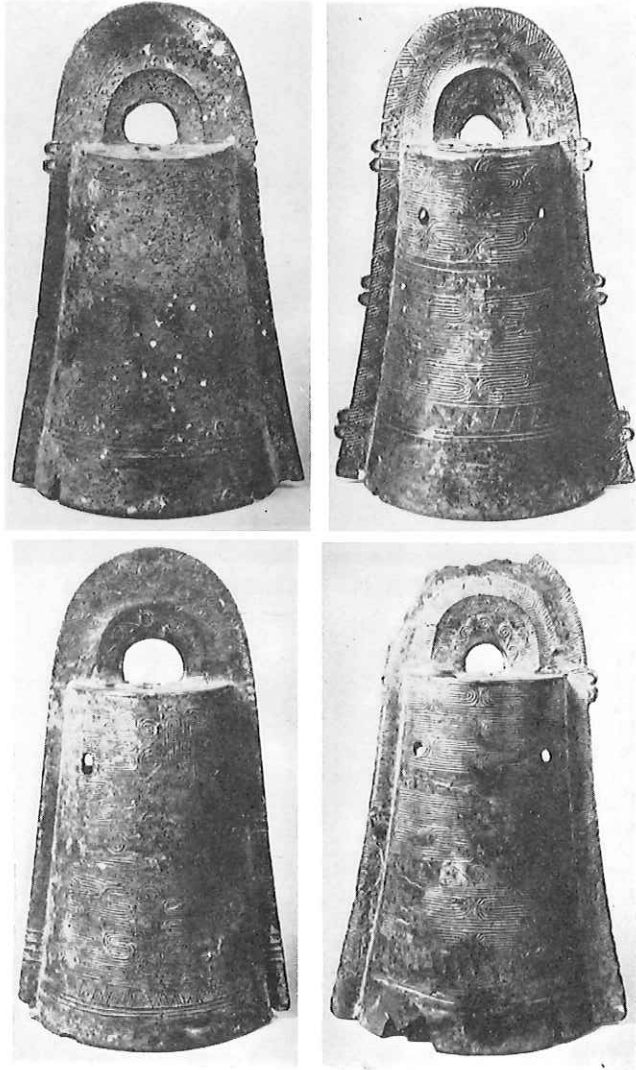


写真 20 気 比 銅 鐸
 (上左) 1号鐸 (上右) 2号鐸
 (下左) 3号鐸 (下右) 4号鐸



写真 21 円形周溝墓（八鹿町米里遺跡）

ら但馬へ、もう一つは大阪府の中河内地方へ運ばれたことが証明される。

第二に、八鹿町米里で発見された円形周溝墓（写真21）は、但馬における弥生時代の墓制について、重要な示唆を与えるものである。地面を円形、あるいは方形に区画する溝を掘り、土を盛り、その中央に遺体を埋葬する墓を、その形から方形周溝墓、円形周溝墓と呼び、畿内では前期の第1様式の時期に既に造られている。これらの畿内文化を色濃く表す銅鐸、円形周溝墓を但馬や丹後で確認することは、中期の段階では明らかに、畿内からの強い文化の影響を受けていたと考えねばならない。

ではもう少し、種々の遺構、遺物を取り上げて弥生時代中期の生活を描いてみよう。土器からみると中期後半には、北但馬は山陰的であり、南但馬は瀬戸内の文様をもつ土器が現れ、地域

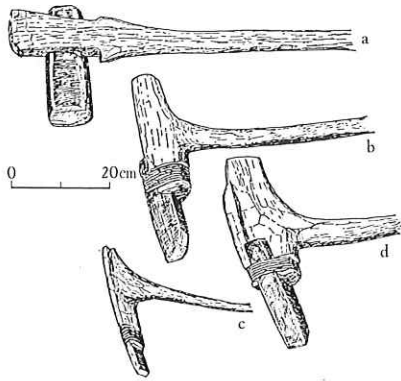


図 21 斧
 (『古代史発掘④』)

差が生じ始めたのかも知れない。石器は出石神社境内出土の大型蛤刃石斧(伐採や荒割り用)、柱状片刃石斧、小形片刃石斧(のみ)、扁平片刃石斧(手斧ちよん)などがあり、木材の伐採や荒割り、小割り、あるいは手斧として石斧が使用されたのであろう(図21)。農具としての石器には、半月形を呈し、一辺の長辺に刃をつけ、二個の紐孔ひもあなをあけた穂摘み具、石庖丁が使用されている。この穂を摘む石庖丁の使用は、稔熟期ねんじゅくの異なる稲穂の選択、つまり適合品種の抽出という作業を、結果として行ったといわれている。

弥生時代の最初から、スキ、クワ、マグワといった農耕具の基本的なものが既に使用されている。水田等の土壌に対応して農耕具の材質も選択され、後には鉄製の刃に代わるようになった。

このころの住居は円形、あるいは隅丸方形に地面を数一〇センチメートル掘りくぼめた竪穴式住居で、屋内に炉を設け、その周囲に柱穴ちゅうあなを穿うっている(写真22)。そして、これらの住居が集まり、集落を形成しているのが普通で、居住地、水田、墓地といった生活区域を分けている例もある。最古の遺跡である福岡県板付遺跡、中期の神奈川県大塚遺跡などでは、集落の周囲に溝をめぐるした環濠集落かんごうしゅうらくを形成している。このころから水田は、今まで地下水位が低くて耕作に適さなかった土地に、杭や矢板を打ち込んで、水路やあぜを作り灌漑排水かんがいはいすいのための土木工事を行い、耕作地としての条件を整えていくことになる。

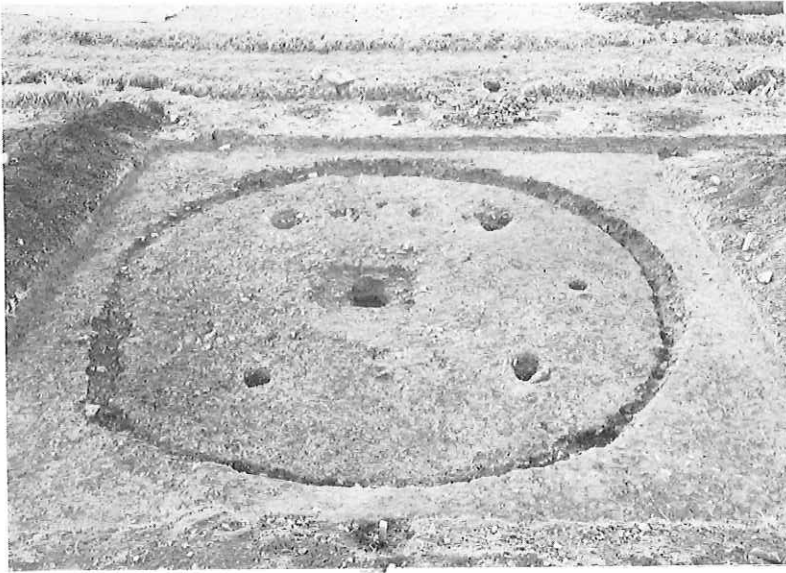


写真 22 竪穴式住居跡（山東町柿坪遺跡）

このようにして、前期以来、稲作農耕の定着によって次第にはぐくまれてきた経験や、技術の開発と導入は、耕地の拡大と安定した食糧を生産することになり、さらに多くの人口を養うことが可能となった。そうして、増加する人口は母村から分村していくようになる。農業を中心に確立された社会は、水と土地を媒介として、一定の河川水系を単位とした各集落間の結合が図られ、出石川を母なる川とする一つの大きなまとまりの中に、右岸では、小野川・袴狭川・入佐川・谷山川等を背景とする小集落が形成されたのだろう。

春に始まる種まきから育成、水の管理、雑草の除去、施肥、害虫駆除、秋の収穫、脱穀、種の管理、米の保存等々といった一連の農作業と管理は、ムラ人の共同作業を必要とし、長老をリーダーとする強い結束のもとに、多種多様

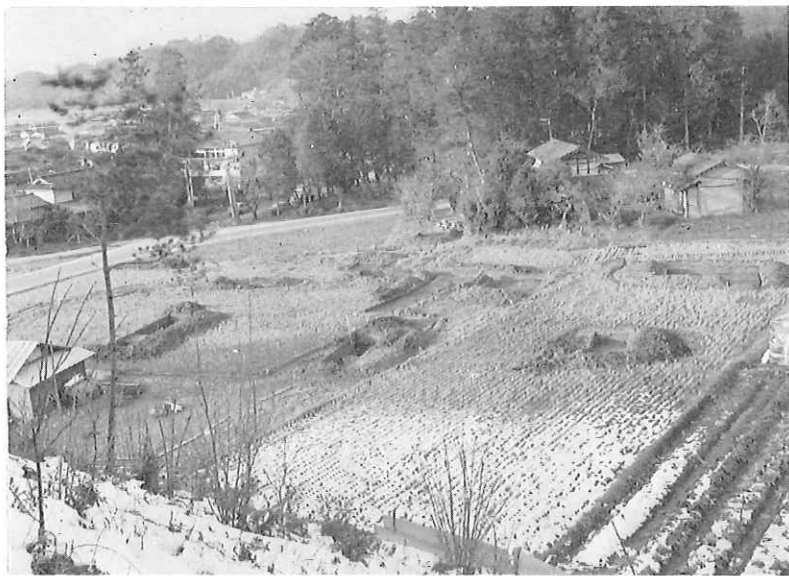


写真 23 出石神社遺跡調査写真

の生産活動を行う村落に変わった。そこには当然のこととして、農耕祭祀^しをつかさどる司祭者が、神を媒介として誕生してくる。

弥生時代後 後期は今までの石器を主とし、
期 鉄器を従とする関係とは異なり、

鉄器が生活の中に普及し、石器の姿はまったくみられることがなく消滅する。町内では、出石神社遺跡、鳥居遺跡出土例、田多地遺跡、西の谷遺跡、上田多地遺跡といった遺跡があり、土器が採集されているが、出石神社遺跡以外、河床や土取りの際に偶然発見された例が多い。また円山川流域の遺跡には、豊岡市の女代神社遺跡・大磯遺跡・塩津遺跡・九日市遺跡・大篠岡遺跡、日高町祢布ヶ森東遺跡・同西遺跡・水上遺跡・南八代田遺跡・久田谷遺跡、八鹿町大明神遺跡などが挙げられる。

後期を代表する出石神社遺跡(写真23)は、一



写真 24 はしごとカメ形土器 (出石神社遺跡出土)

九七九年(昭和五四)一二
月、道路建設に先立って
調査が実施された。調査
区が宮内字三井町ほかの
道路予定地内であったた
め、出石神社遺跡の東南
部分の範囲確認調査をす
る結果となった。弥生時
代中期・後期・古墳時代
の初頭に属する生活遺物
と、奈良・平安時代の掘
っ立て柱をもつ建物三棟
が検出された。

この遺跡の中心となる時期は後期で、遺構としては、谷あいを通れる旧河道が枝状に分かれ、その小川の中に木器・土器が堆積していた(写真24)。木製品は明らかに鉄器を使用しないと製作できないもので、高床式の倉庫に登るのに使われた梯子が二例、円盤状の鼠返しかと思われる未完製品の盤状木器、倉庫の板扉をとりつける蹴放材が出土しており、高床式倉庫が建てられていたことが証明された(図22)。また、何かの柄と

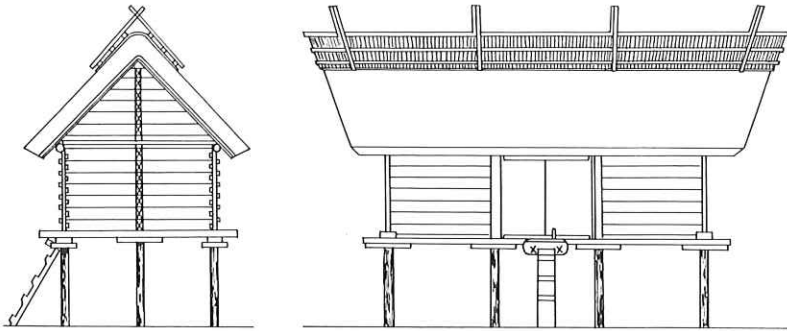


図 22 高床倉庫（愛媛県古照遺跡）

して使用されたもの、桶かめの底板状を呈する木製品が出土しており製作技術、内容からみて高度な完成された生活文化を築いていたことが分かる（写真25）。

土器は、壺、カメ、高杯などの基本的な土器の中に、把手をつけたり、頸部の大きく外反するものなどさまざまな器形がある。特にカメの口縁部に貝の腹縁で凹線を施す擬凹線文は、中期の一本一本施文する凹線文とは異なる手法である（図24・25）。

この出石神社遺跡の遺物を見ると、前期から後期、そして古墳時代にかけて営まれた継続遺跡であることが分かる。それは、出石神社付近を中心としてムラが盛え、特に農業神を祭るムラとして後の古墳時代を経て、奈良・平安時代へと時代が下る過程で天日槍伝説あめのひざこを生み出す程の基盤を築きつつあったのではないだろうか。

宮内から袴狭へ通ずる上坂かみさかより少し宮内側に寄った斜面からは、小学生在が採集した完全なカメ形土器がある。また口縁部に四条の凹線をめぐらし、円形の浮文を貼りつけた器台の口縁部が、上田多地の六方川より採集されている。脚部以下は欠損しているため不明であるが、次に述べる大谷出土例同様の器形をとるものと思われる（図24・7）。

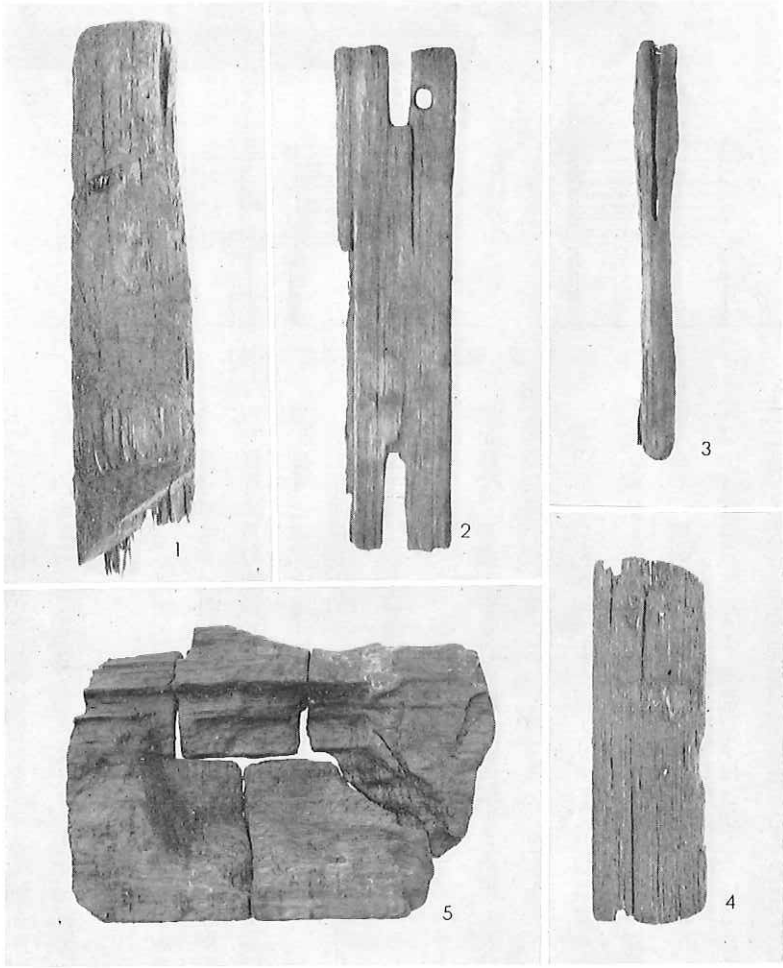


写真 25 木 器（出石神社遺跡出土）

1. 梯子 2. 蹴放材 3. 木柄 4. 曲物の底 5. 盤状木器



写真 26 器 台 (大谷区出土)

これは、町内では珍しく左岸に位置する大谷区の尾根上で、偶然発見された器台である(写真26)。鋸齒文を施した口縁部に、円形の浮文を七〜八か所貼りつけたもので、脚部には三段の四方にあけた透かし穴がみられ、高さ二八センチメートルを測る。この土器の出土状態、遺跡の立地などから、墓の可能性も含まれている。以上のような遺跡が出石町では見付かっている。集落遺跡や集団墓地といった生活跡の調査が行われていないため、生活道具の断片である土器、石器、木器という遺物をつなぎ合わせて、全体像を描くほか仕方がないけれども、後期になっても生活基盤は、上坂・出石神社遺跡等の立地する微高地上や、尾根の先端が平地に降りるややゆるやかな傾斜地に求められ、水田は当然その下の低地に開いていただろう。墓については、あまり好例とはいえないが、大谷出土の器台が墳墓を推測させる唯一の例である。

土器のあり方は、日本海に面した山陰地方一帯を擬凹線を主体として、分布するようになる。それは、但馬において、主体的な土器をもつ段階にいたったことを示すものでありながら、出石神社遺跡・日高町南八代田遺跡・久田谷遺跡出土土器の中に、大阪府の南部、旧河内国かわちのくにで作られたとされている「河内の土器」が運ばれており、但馬と河内とが密接なつながりをもっていることが明らかとなり、丹後・丹波といった周辺の地域とも密接に交易などが行われていたと推測される(図23)。

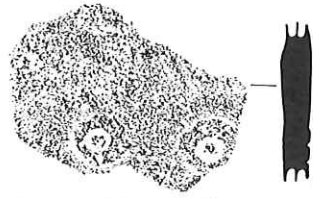


図23 河内から運ばれた土器
(出石神社遺跡出土)

銅鐸から古 出石町内からは出土していないが、畿内文化を象徴するものとして銅鐸がある。但馬では円山川右岸と左岸に二遺跡五個(?)が出土している。右岸に豊岡市気比銅鐸(四個)、左岸に日高町久田谷銅鐸(二個?)である(写真27)。気比銅鐸は、前述の流水文を多用した外縁付き鈕式銅鐸(佐原真の型式編年)で、ゆり鳴らす銅鐸である。久田谷銅鐸は、突線鈕式の終わりごろの、「見る銅鐸」で、ゆり鳴らす機能は失われている。

銅鐸の型式編年からいうと、気比銅鐸、久田谷銅鐸の順に製造されたことになり。前者は岩窟より出土しており、何かの理由があつて隠されたものと推定される。後者は弥生時代中期に始まる、集落に近接した場所から一一七片の細片に「破碎された」状況を呈して見付かっており、河内から運ばれた土器もこの遺跡から出土することは何をあらわしているのだろうか。

銅鐸は、舌と呼ばれる垂直に吊した石、あるいは銅製の棒が、外容器にあたることによって音を発するので、今日ではその性格を、相伴する青銅利器や出土状態から推して、農耕祭祀の行事に使用された祭器と考えられている。ところが、古墳時代に入ると銅鐸はこつぜんと消え、山の斜面、集落、大岩、川のそばなど、なら特別な施設をもたないさまざまな場所から偶然発見され、銅鐸としての機能を完全に失った姿をそこに見ることができ。六甲山の南斜面、神戸市灘区桜ヶ丘遺跡では、一四個の銅鐸と七個の銅戈が出土し、また滋賀県野洲郡野洲町小篠原遺跡では二四個の銅鐸が、一か所に集中して出土した例などがある。

このことについて、小林行雄は、「もとは、それぞれちがった村に所属した銅鐸を、それらの村々の統合

墳の話」と推測している。そうすると、久田谷銅鐸は久田谷の集落内に破砕することによって、気比銅鐸は四か所のムラから集められたのか、あるムラの祭器であったのか分らないが、気比の岩窟に埋納することによって古墳時代を迎えることになるのであろうか。そう考える時、埋めさせた人物はどこへ行ったのであろうか。但馬地方でも最古の古墳に葬られた人物こそ、銅鐸をこの世から隠した人物であるのだらうか。

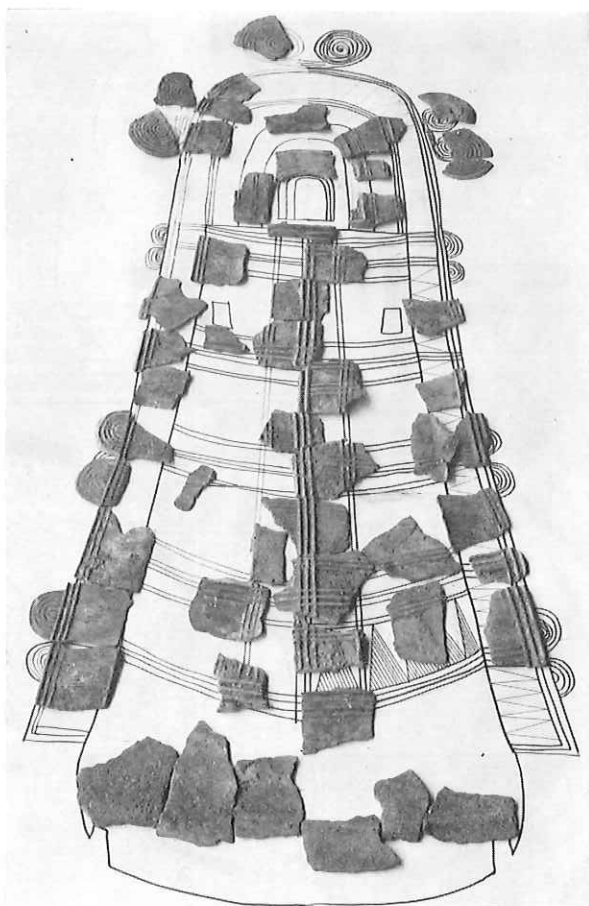


写真 27 久田谷銅鐸（日高町久田谷出土）

によって、一か所にあつめて共同の祭祀に使用したか、あるいは、あたらしい国の発足を記念して、埋藏したものであるかと思われる。もしそうであるならば、ここにあたらしい強大な一人の首長の地位も誕生したことであろう。」(古

第3節 弥生時代の出石

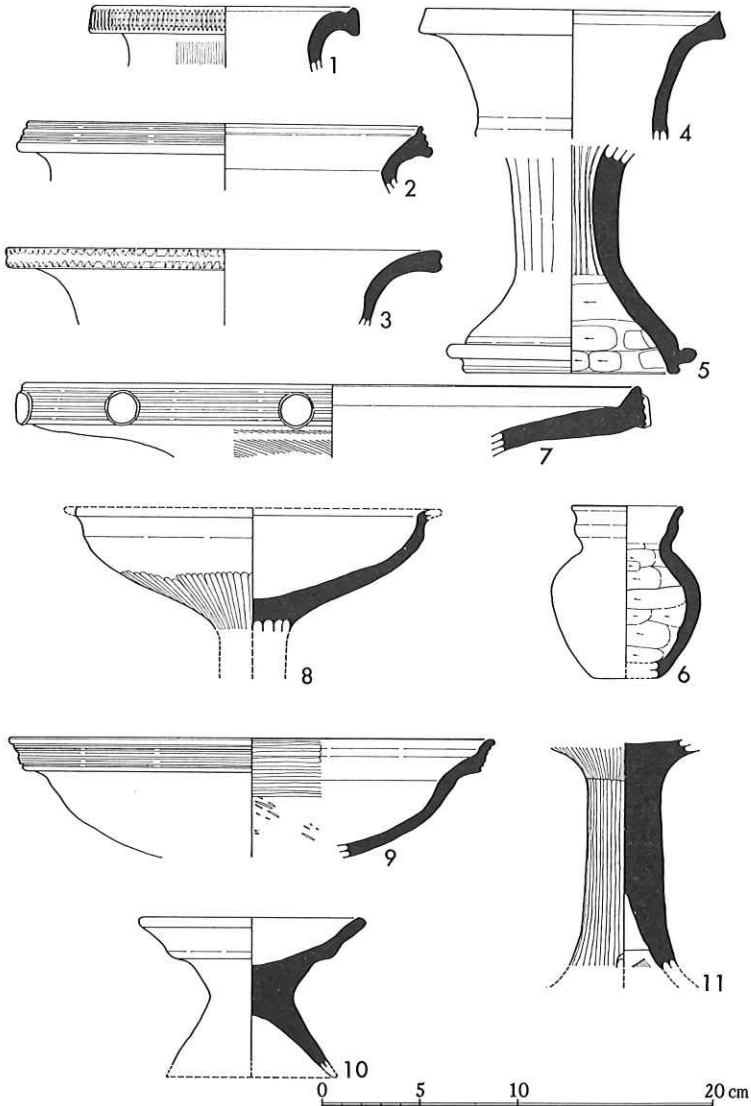


図 24 町内出土の弥生土器—1
 (後期 田多地区の六方川河床・他は出石神社遺跡出土)

第2章 考古学からみた出石

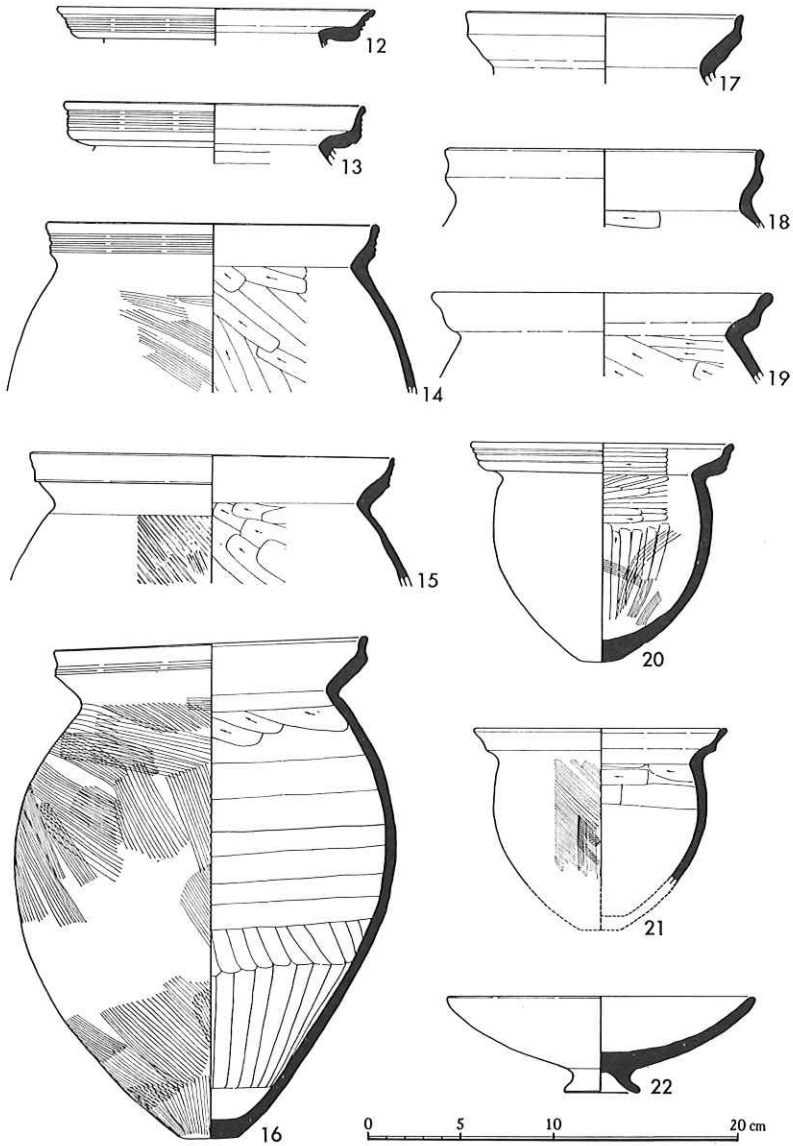


図 25 町内出土の弥生土器一 2 (後期 出石神社遺跡出土)

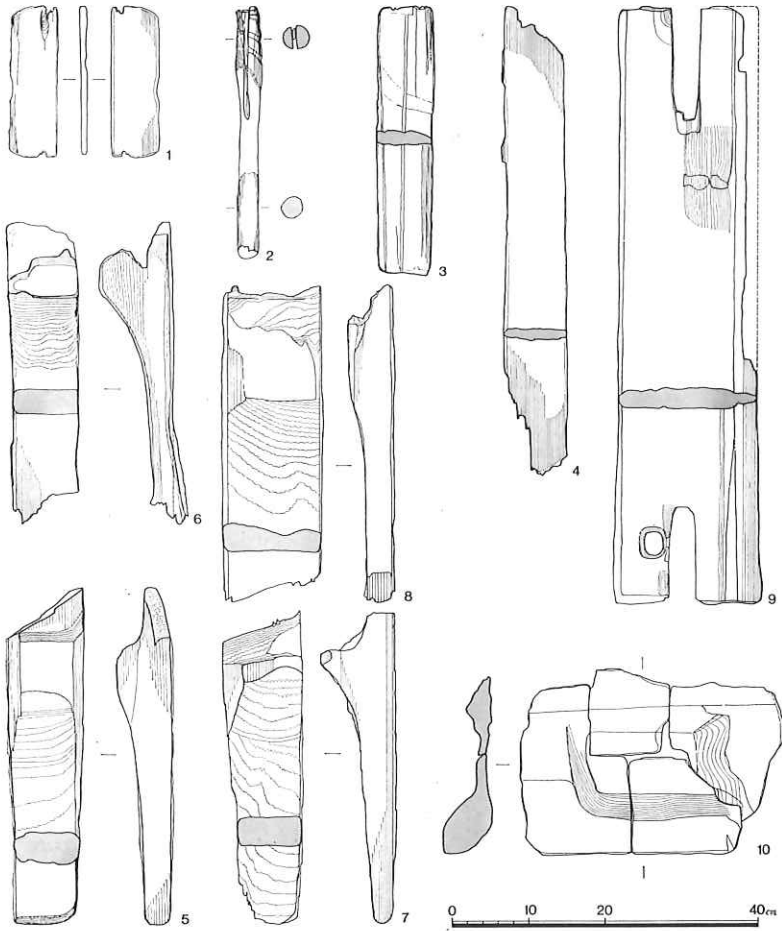


図 26 出石神社遺跡出土の木器

1. 曲物の底 2. 木柄 3.4. 建築材 5~8. 梯子, 9. 蹴放材 10. 盤状木器

第四節 古墳に埋葬された人々

稲作文化の 縄文時代から弥生時代への移行が、稲作文化の伝播により社会基盤そのものが、大きく根底から変化したのに対して、古墳時代は農耕社会の中から生まれ、芽生えた到達点といえる。

この時代は邪馬台国の女王、卑弥呼が埋葬された「径百余歩の塚」の築造によって始まる。多分、その塚は前方後円墳であろう。現在では、前方後円墳という巨大古墳の出現をもって古墳時代とみなしている。この時代の実年代は、文献・副葬品等によって大体のを知ることができる。

『宋書』倭国伝、その他には倭の五王の一人讚（仁徳天皇）が西暦四一三年、東晋の安帝の時代に朝貢を行い、四二一年、宋に朝貢して武帝より叙授の詔を賜り、以後、珍・濟・興・武の倭王は宋へ朝貢を行い王の称号を得ている。また熊本県江田船山古墳出土の太刀には「治天下復ミズ齒大王世云々」の銀象散銘を施しており、その銘文中のミズハ大王が反正天皇と推定されるなど、古墳の年代を考える断片資料がある。

副葬品からみると、大阪府和泉黄金塚古墳出土の景初三年銘重列式神獸鏡、後述する豊岡市森尾古墳から発見された、正始元年銘三角縁神獸鏡、同じく宝塚市安倉古墳出土の赤烏七年銘半円方形帯神獸鏡など、製作年代を記した遺物から実年代を探ることができる。これらの考古資料と弥生時代の状況を踏まえて、古墳

時代の始まりを三〇〇年以前に求める説、三〇〇年ごろとする説がある。ここでは、後者の説をとりたい。

古墳時代の終末は、大体のところ西暦六四六年（大化二）に出された大化薄葬令によって一応の終末を迎える。しかし、この令制に基づいて全国一斉に古墳が築造されなくなった訳ではなく、地方によっては七世紀後半にまで残る例もある。この古墳時代の古墳は、縄文土器・弥生土器といった土器を基準にして名付けた時代の名称と異なり、この時代を極めて象徴的に表す記念物名で、山の頂、丘陵、平野などに全体の長さが一〇〇〜二〇〇メートル、それ以上におよぶ前方後円墳に代表される高塚墳墓である。

古墳の形には、前方後円墳、前方後方墳、双方中円墳、帆立貝式古墳、円墳、方墳などがあり、特殊例もある。前方後円墳がどのようにしてできたものか、まだよく分からない点も多いが、古墳時代の始めから、この形が生まれており、石室を設けた後円部に対して、祭壇ともいえるべき前方部をつけ加えた形が、前方後円形になったと理解するのがよいのではなからうか。また五世紀に始まる倭の五王の中国への使者派遣、百濟（百済）、高句麗との関係や、朝鮮の焼物（須恵器）の導入と工人の渡来、横穴式石室の導入、さらには仏教の伝来といった大陸文化との交流が、この時代から始まる点は注目しておかねばならない。

出石の古墳

但馬の古墳数は、現在正確な数を知るすべもないが、数千基を数えるものと推定される。出石町にも多数の古墳があり、一九七四年（昭和四九）の調査によると一一九基を数え、未発見のものを加えると数百基はあるものと推測される。代表的な茶臼山古墳、長持形石棺をもつ古墳、家形埴輪（埴輪）が出土した入佐山古墳など、その規模、内容からいっても北但馬を代表する古墳群地帯である。

そこで、但馬における古墳の変遷を概観しながら、出石の古墳群の特徴を取り上げ述べていきたい。古墳

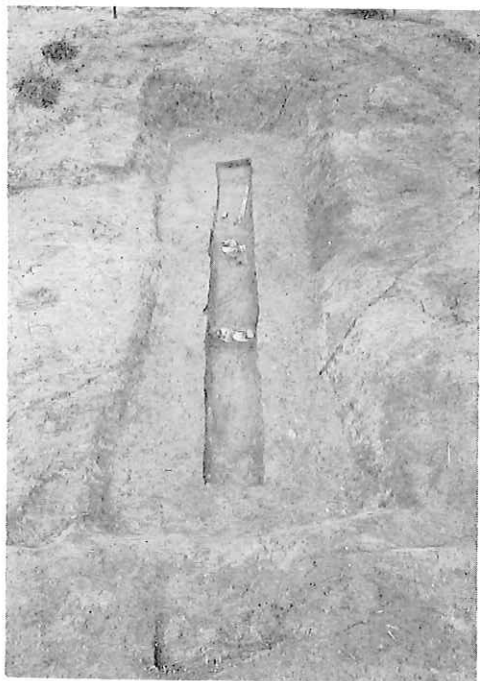


写真 28 城の山古墳 (割り竹形木棺・和田山町)

時代の墓制にはさまざまな埋葬形態がある。弥生時代の墓制の流れをくむ但馬地方の墓制、土塚墓・木棺直
葬墓(組み合わせ式箱形木棺)・組み合わせ式箱形石棺墓・方(円)形周溝墓・壺棺墓・台状墓、畿内古墳文化の
波及によって新しく築かれるようになった前方後円墳・方墳・円墳、そして内部主体には、堅穴式石室・割
り竹形木棺・横穴式石室・崖面がけに掘られた横穴などの墓制である。

但馬の古墳

但馬における古墳の分布は大きく分けて、円山川上流の和田山町を中心とする、城の山じょう・池
田古墳を代表とする城の山古墳グループと、円山川下流、豊岡市、出石町を中心とした森尾

古墳を代表とする森尾古墳グループと
に分けるひつ櫃本誠一の考え方をとると、
城の山古墳グループには、城の山古墳
(写真28)・筒江中山古墳群・池田古墳・
長塚古墳・小盛山古墳・冑塚古墳・奥
山一号墳・加都大塚・春日一号墳・大
谷二号墳(和田山町)、船之宮古墳(朝来
町)、柿坪中山古墳群(山東町)、観音塚
古墳・大藪古墳群やぶⅡ禁裏塚古墳・塚山
古墳・西の岡古墳・コウモリ塚(養父町)
がある。

出石町の属する森尾古墳グループには、茶臼山古墳・入佐山一号墳・鶏塚・下安良古墳(出石町)、森尾古墳・納屋ホーキ古墳・見手山古墳・大師山古墳群・矢立古墳群・立石古墳群・鎌田古墳群・七ツ塚古墳群・下陰古墳群(豊岡市)、小見塚古墳・二見谷一号墳・四号墳(城崎町)、栢縫古墳(日高町)等々が該当する。

これらの古墳は、各地域で大型古墳を中心として展開されるピラミッド形の階層性の一端を担った被葬者の墓といえる。そして、古墳の形、内部構造(石室、外部構造(埴輪、葺き石)、副葬品としての出土遺物)とおして、一世一代墳とする親・子・孫へと系譜をたどることの可能なグループである。ただ横穴式石室を採用する後期古墳の始まる五世紀末から六世紀初頭以後、各水系、沖積地、谷間を背景とする小さな範囲で古墳の築造が行われるようになった。例えば、養父町大藪古墳群、八鹿町国木とが山古墳群、城崎町二見谷古墳群などがある。

単独埋葬を常とする前期の古墳に葬られた被葬者と、石室に幾人もの人が埋葬された横穴式石室の被葬者とは性格を異にするようになっていく。絶対的な権力者と、その周辺の者のみの墓であったものから、次第に墓を築造することのできる人々の範囲が広がり、下級の人たちもある限られた場所に墓を築くようになる。

最古の古墳

豊岡市森尾に位置する森尾古墳は、但馬最古の古墳といわれている(図27)。丘陵の先端に立地し、南北径九メートル、東西径六メートルの小円墳である。並列する三基の石室を有し、内部主体には割り石を用いた小型の竪穴式石室を築いている。第一、三石室は長さ約二メートル、第二石室は三メートルを測る。遺物としては、三角縁四神四獣鏡、□始元年陳是作銘神獸鏡(写真29)、方格規矩鏡、玉類(勾玉、管玉、小玉)、銅鏃、鉄器(鉄鏃、鎌、鉄斧、鉄劍)、石杵状石製品などが発見されている。

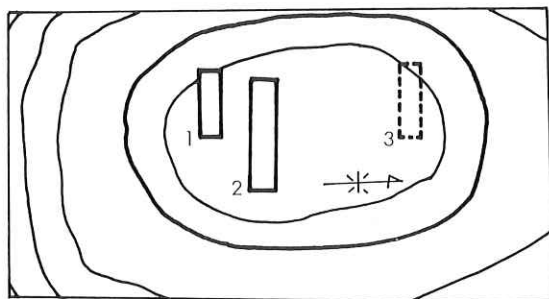


図 27 森尾古墳外形図
1. 第1石室 2. 第2石室 3. 第3石室



写真 29 □始元年銘鏡（森尾古墳出土・
京都市立大学文学部所管研究室蔵）

魏の国へ使いを送った卑弥呼に贈られた銅鏡一〇〇枚が、一時卑弥呼の手元で保管された後、各地の首長に分配されたものと考えられ、その銅鏡の配布をうけた各地の首長が後世に伝えた後、ある時期がくると伝世の宝器としての扱いを捨て、次代を担う首長（権力者）の手によって首長と

この□始元年陳是作銘神獸鏡の不明の□内の年号についてさまざまな見解が発表され、群馬県高崎市柴崎蟹沢古墳（一例）、最近新たに確認された山口県新陽市竹島御家老屋敷古墳（一例）などの出土例から、「泰」始元年ではなく、魏の時代の「正」始元年（西暦二四〇年）であることが確認され、三角縁神獸鏡が魏で製作された銅鏡であること、それも、邪馬台国の女王卑弥呼によって、二二九年以後日本に魏の国より舶載されたものであると究明された貴重な銅鏡の一面である。

またそのことは、梅原末治、小林行雄の畿内邪馬台国説を強力に裏付ける伝世鏡理論、同范鏡理論とも深く関係するものである。西暦二二九年、

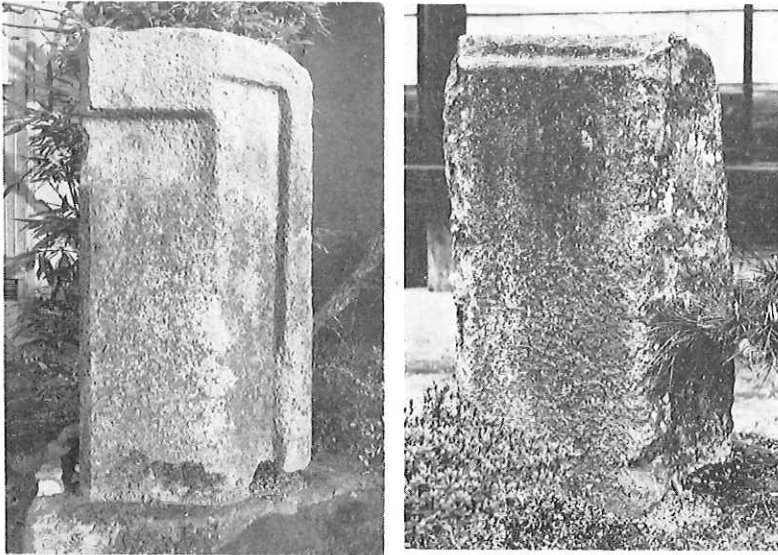


写真 30 長持形石棺蓋石・出土地不詳（左は本覚寺・右は町教育委員会蔵）

共に埋葬された。その死した首長の一人が森尾古墳の主であり、その首長を埋葬した人物こそ新しい時代の首長といえる。

この古墳の築造年代は四世紀後半と考えられる。また森尾古墳に次ぐ四世紀末から五世紀初めと考えられるものに、変形四獣鏡、三角縁波文帯三神三獣鏡を出した城崎町今津の小見塚古墳が知られる。

竪穴式から横 次にく古墳としては、現在、当穴式石室へ 町内出土の長持形石棺をもつ古墳、

谷山字椋谷に立地する茶臼山古墳、入佐山古墳などが該当する。長持形石棺は現在、町教育委員会の前庭に、石棺の内外面に朱が塗られた小口石一枚と、蓋石の断片が一枚保存されている（写真30・図28）。かつてこの側石は出石城内本丸に、蓋石の一片（写真右）は弘道小学校中庭にあったもの。他の一片は現在魚屋区本覚寺境内に保存されている。

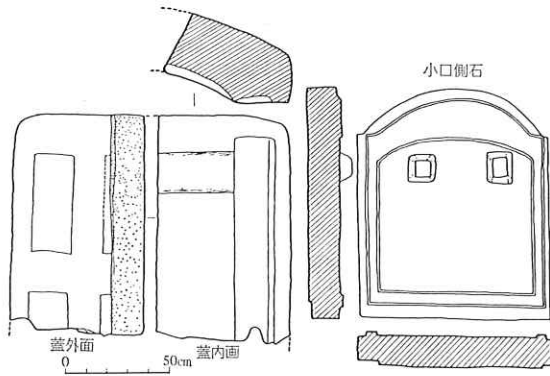


図 28 長持形石棺遺材

これらはどの古墳から掘り出したのか不明な点が多く、さまざまの意見が入り乱れている。それは、巨大古墳の内部主体である長持形石棺にもかかわらず、掘り出された伝承がまったくないこと、この石棺をもつのにふさわしい古墳、すなわち出土町内の古墳を凌駕する前方後円墳が見当たらないためである。

そこでこの長持形石棺を有する古墳を全国に求め、どのような古墳に使用される性格のものかを探ってみよう。長持形石棺は底石と四枚の側石と蓋石との六枚の石でもって組み立てる組み合わせ式石棺の一種である。石棺の両端に一〜二個の縄掛け突起が造り出されている。いわゆる古墳時代中期の代表的な石棺である。

畿内では、大山陵古墳（伝仁徳天皇陵）を始め、大阪府津堂城山古墳、誉田山古墳、奈良県宮山古墳といった最大規模を誇る巨大前方後円墳に葬られた王者の棺として採用されている。関東地方最大の古墳、群馬県天神山古墳、お富士山古墳、九州地方の佐賀県谷口古墳、福岡県月の岡古墳、兵庫県内では篠山町雲部車塚古墳、姫路市壇場山古墳、加西市玉丘古墳といった県下第二、三位の前方後円墳の柩として使われている。また、近隣の例として、丹後半島の岩瀧町男山法王寺古墳（前方後円墳）、丹後町赤山古墳（円墳）、産土山古墳（円墳）にも使われている。

このような大形の前方後円墳に採用されている事実と、これらの



写真 31 池田古墳（前方後円墳・和田山町）

古墳が古墳群の中で盟主的な位置を占めることから、倉敷考古館の間壁忠彦は「中国の史書『宋書』に現れる倭の五王の時代に、畿内地方を中心に権力を得た王者たちと、地方では最も有力な勢力者の棺であったのが長持形石棺なのである。」（『石の宝殿』とされ、この長持形石棺を枢とする被葬者は五世紀ごろの北但馬を代表する絶対的な力をもった王者であったと思われ、円山川上流の城の山古墳グループの池田古墳（写真31）に対応する古墳と考えてよいだろう。

次に、谷山区の茶臼山古墳を取り上げてみよう（図29）。この古墳は、鶏塚古墳・丸山古墳・笠森古墳・入佐山古墳群一〜三号墳等をひとまとめにして谷山古墳群と新たに名付けることが許されるなら、この古墳群の盟主的な墳墓といえる。舌状尾根を

第2章 考古学からみた出石

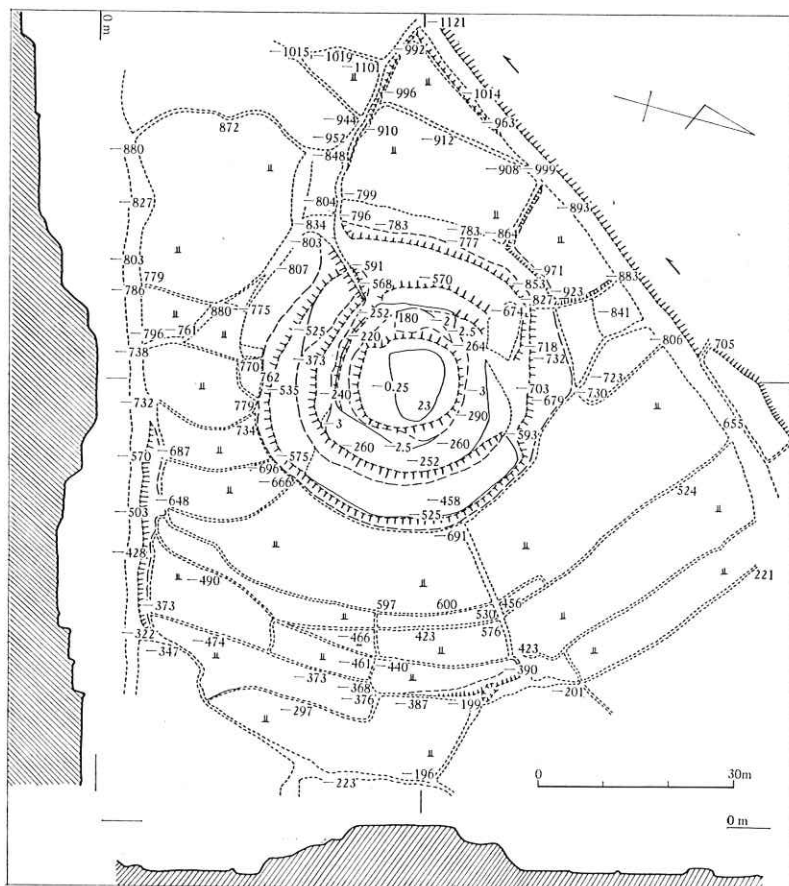


図 29 茶白山古墳実測図

切断して直径約四九メートル、高さ約七メートルの三段築成の円墳を築造し周濠をめぐらした大形のものである。内部主体は分からないが、天井石と思われる板石が墳丘にある。墳丘から円筒埴輪が出土しているが、その中には須恵質のものも含まれている（写真33）。



写真 32 茶臼山古墳と入佐山（東面）

同じく埴輪をもつ古墳として、入佐山一号墳がある。この古墳は、入佐山（写真32）の山頂に位置し、前方後円墳かと推定されているが、大正年間に大きく崩されたため残りが悪く、内部主体も不明である。出石高校に保存されている家形埴輪は今のところ但馬では唯一のものである（写真34）。豊岡盆地に点在する古墳の内、埴輪をもつ古墳としては、城崎町の小見塚古墳・スクモ塚・大神古墳、日高町の馬場ヶ崎古墳と出石町の二古墳、計六古墳を数えるのみで、茶臼山古墳・入佐山一号墳といった近接して埴輪をもつことは、何らかの共通する背景の中から築造された古墳

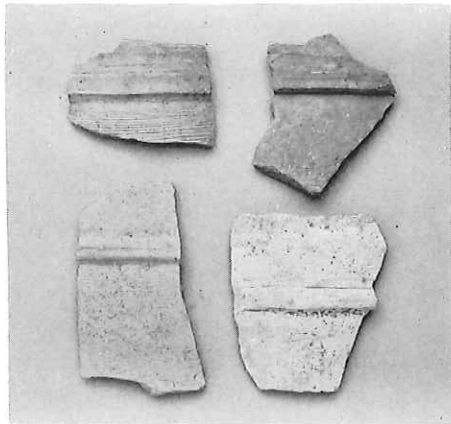


写真 33 円筒埴輪片（茶臼山古墳出土）

第2章 考古学からみた出石

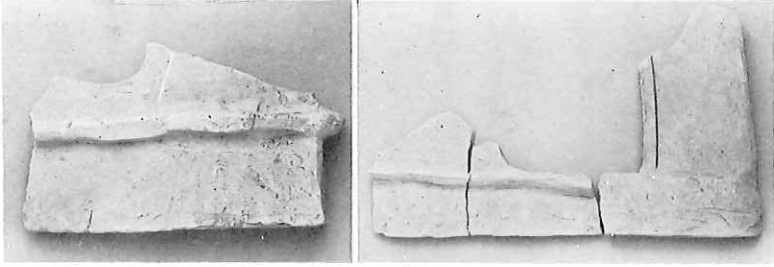


写真 34 家形埴輪 (入佐山古墳出土)

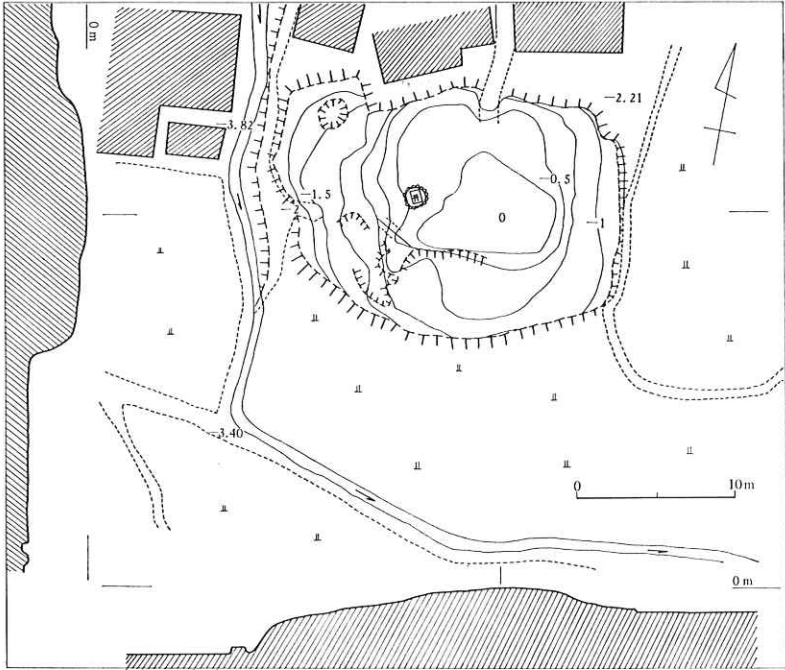


図 30 鶏塚古墳実測図

と思われる。

鶏塚古墳は、この谷山古墳群の中で内部主体の分かる、それも横穴式石室を有する古墳である（図30）。平地に立地し、径約二五メートル、高さ約三メートルを測る円墳である。石室内から乳文鏡、須恵器、刀、剣、鉾、斧（おの）、小玉が大正年間に発掘され、現在、東京国立博物館に所蔵されている。

以上の谷山古墳群の中で、大ざっぱに系譜をたどると、入佐山古墳、茶臼山古墳のどちらが先に築造されたか定かでないが、前期の古墳が山上や丘陵上に位置することを考え、両者とも埴輪をもっているが、茶臼山古墳の場合は新しい要素である須恵質のものをもつなどから、入佐山古墳、茶臼山古墳の順で築造されたと思われる、五世紀中ごろから後半にかけてのものと考えられるだろう。また前述の長持形石棺を有する古墳は、この古墳群の中にあつたものとするのは誤りではないと思われる。そして、後期の古墳の特徴である横穴式石室を有する鶏塚古墳が現れる。

横穴式石室

横穴式石室は今までの単独埋葬の縦穴式石室とは異なり、幾人もの人を葬ることのできる複

の時代

数埋葬用の石室である。なぜかといえは、石室の構造が死者を運び入れるのに都合のよい横

穴で、羨道（せんとう）と名付けられた通路を石や粘土で閉じること、簡単に外部と遮断（しや）ができ、また、開閉することも可能である。これは調査によって石室内に数体の人骨が確認されたり、後から葬られた被葬者によって、須恵器や鉄器といった副葬品が、隅の方へ片付けられた状況が見られることよって判明したものである。

このことは前期から続いた墓の形式（縦穴式石室）とは大きく異なる。畿内からの新葬法の導入（横穴式石室の採用）は、社会の上層クラスの墓としてまず構築された。そして、後には地位の下がるクラスの人々へとひ

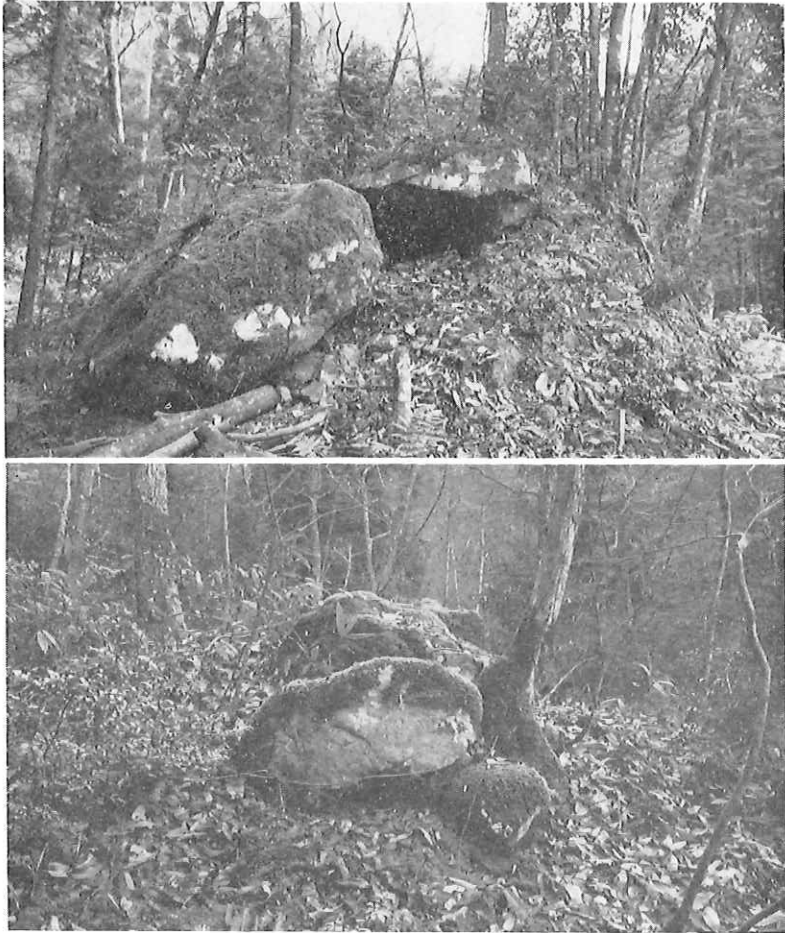


写真 35 横穴式石室をもつ古墳 (上) 大谷中岡群集墳第3号墳
(下) " " 4号墳

ろがって
った。具
体的には、
横穴式石室
は、一人の
世帯主とそ
の家族が葬
られる家
族墓的な
性格を示
すものと考
えられる。
出石川右
岸に位置
する古墳
の中では、
既述した
谷山古墳
群の鶏塚

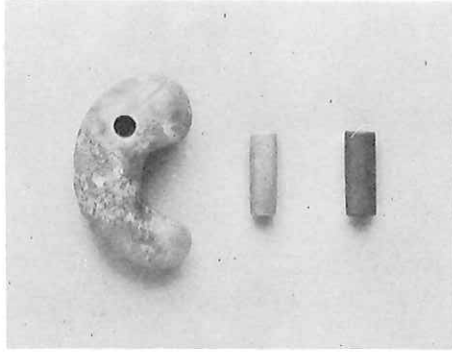


写真 36 勾玉と管玉 (箱根山古墳出土)

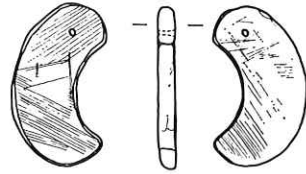


図 31 滑石製勾玉
(小野小学校裏山出土) ½

黒谷群集墳・中村古墳群・尾崎古墳・平田古墳・塚ヶ谷古墳など、かなりの数の横穴式石室が構築されている(写真35)。

これらの分布をみていくと、左岸に多く、右岸に少ない現象が見ら

れるが、現在の谷や水系等により、一つの集落を単位とする古墳群が形成されていったことが分かる。出土遺物の須恵器、勾玉、鉄製品等々から、六世紀中ごろ以後に爆発的に築かれたものと考えてよいだろう(写真36・図31)。

横 穴

宮内区には、かつて坪井一ノ二号と下坂一ノ三号墳(図32)の横穴五基があった。現在は土取りによって崩され、遺物のみ町教育委員会に保管されている。この横穴は、日本海に面した竹野町阿金谷あこんだにのほか、豊岡市日撫ひなな・(旧出石郡神美村)森尾・上鉢山・長谷・倉見、出石町田多地・宮内などの南山麓に多く点在している。

古墳が、従来から古い様式をもつ横穴式石室といわれ、町内の古墳としては一番古い横穴式古墳かも知れない。そのほか、寺坂区の寺坂一号墳、口小野区の篠谷古墳が点在する。左岸では、多くの古墳がある。標高一八三メートルの大谷山頂群集墳(二五基、円墳)・大谷中岡群集墳・宮の奥群集墳・べろ群集墳・

第2章 考古学からみた出土

◎玄室部(西側)よりの見取図

(破壊時の推定測量)

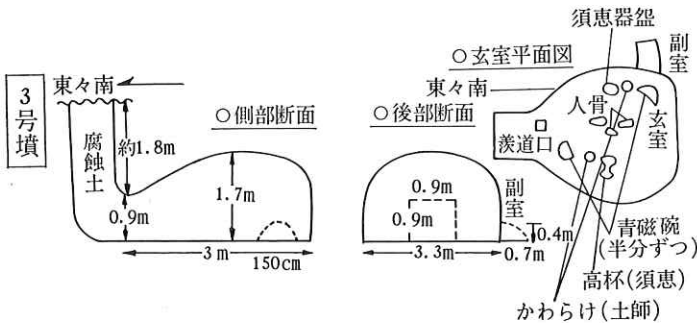
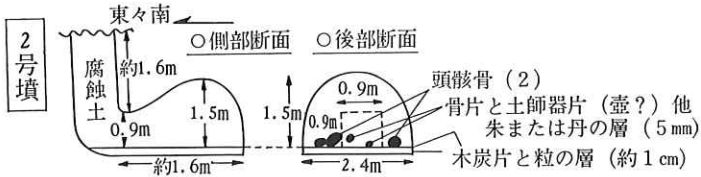
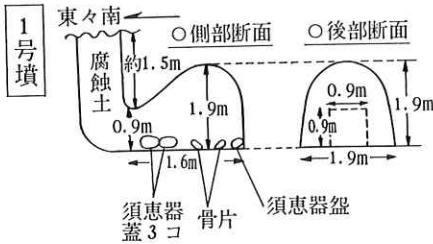
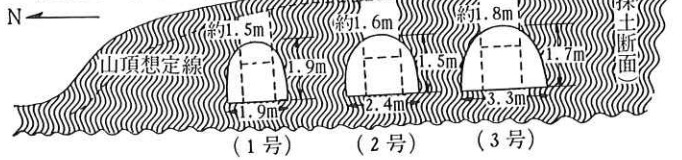


図32 下坂の横穴

第4節 古墳に埋葬された人々

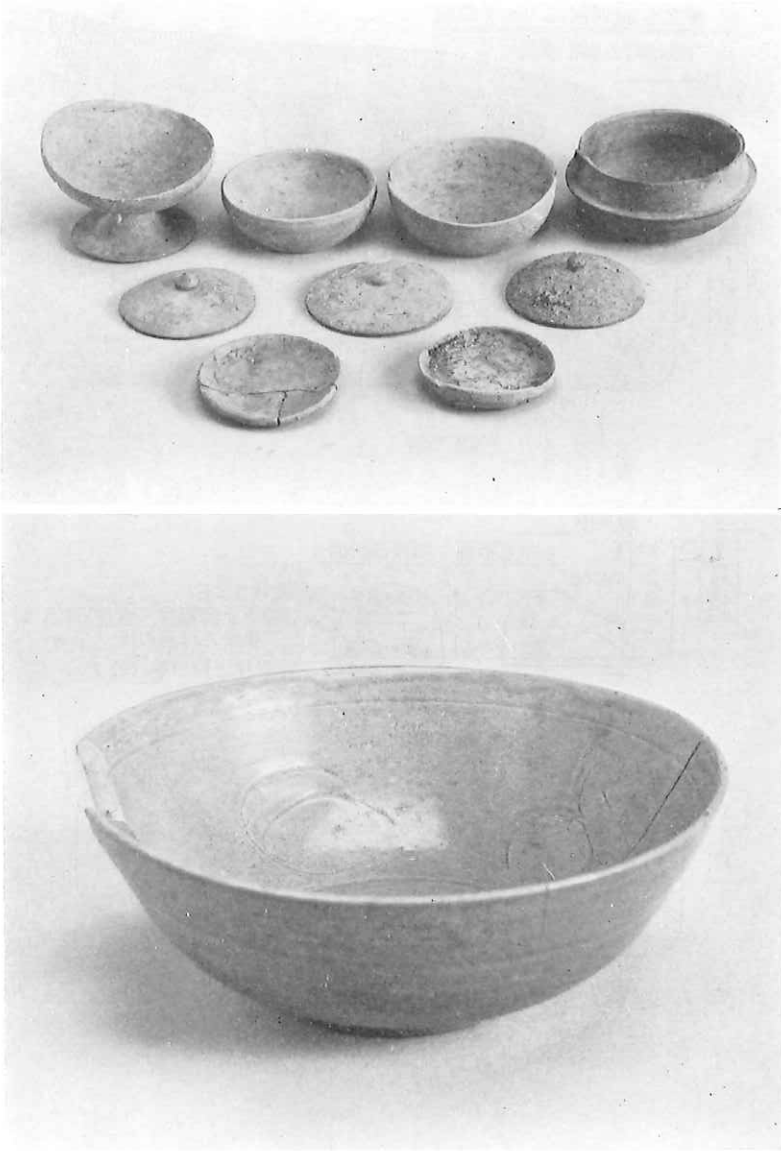


写真 37 須恵器と青磁碗(下坂3号墳出土)



写真 38 木棺直葬墓と組み合わせ式箱形石棺（田多地3号墳）

これは、花崗岩をくり抜いて墓室を造るもので、横穴式石室同様、玄室と羨道とがあり、玄室には副室を添えるものもある。部屋の形を呈し、断面は半円形をとる。この横穴は横から掘りくほめたものと、地下に掘ったものがあり、後者を地下式横穴と呼んでおり、下坂三号墳などはこれに該当する。この三号墳内には、鎌倉時代の青磁碗が真二つに割って追葬されていたもので、製作時期を異にする須恵器も出土していることから数回にわたり追葬されたことを物語る（写真37）。六世紀終末から七世紀にかけて造られたものであろう。

在地型の墓

制

弥生時代から継続して造られた墓には、集団墓を形成する例が多い（写真38）。一つの尾根、あるいは丘陵上に様式の異なる墓を造るもので、木棺、組み合わせ式箱形木棺、壺棺を埋葬した例、方形に区画



写真 40 木棺直葬墓
(田多地3号墳第10主体)

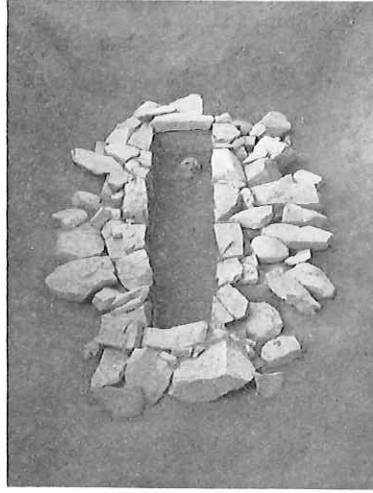


写真 39 小型の堅穴式石室
(山東町柿坪中山古墳群第3号墓)

した台状の墓域の中に、木棺を直葬、あるいは小型の堅穴式石室を内部主体とした例(写真39)があり、一墳丘内に一人を埋葬して用いるものではなく、多くの被葬者を順次埋葬した共同墓地であったことは明らかである。田多地三号墳の場合は、一墳丘内に一三基の埋葬が見られた。そこには、副葬品の多少はあっても、被葬者に優劣の差をあまり認めないのである。

木棺直葬墓 この墓は三枚の板で底と両側を作り、

二枚の木口板と蓋板によって組み立てる組み合わせ式木棺と、木を半分に割り、内部をくり抜いた割り竹形木棺とがあり、これらの木棺を墓域の中に納めた後、土を戻し、土盛りをして墓とした簡単な葬法の一つである。但馬にはこの墓が非常に多く、丘陵や尾根からたくさん見付かっている。

一九八一年(昭和五六)三月に調査された田多地三号墳には、一つのマウンドに一三基もの墓が発見され、その内、組み合わせ式箱形石棺二基、石室様石棺一基、割り竹形木棺一基、組み合わせ式木棺五基(内不明三)が確認されている(写真40)。

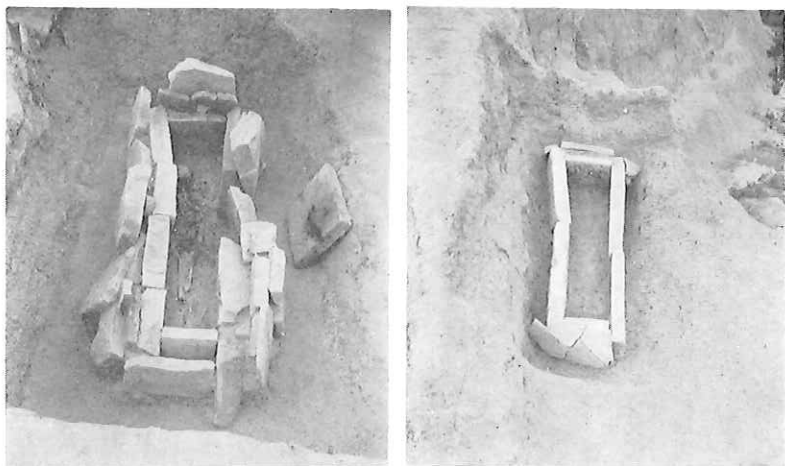


写真 41 組み合わせ式箱形石棺（田多地3号墳）左 第5主体・右 第3主体

この墓は大体において群在して発見される場合が多く、第二主体（組み合わせ式木棺）の大きさは幅一・三×長さ四メートル、この棺を入れる掘り方は二・一×四・八メートルを測る。木棺にはべんがらが塗られ、副葬品には鉄鏃、ヤリガンナが各一本出土した。第四主体（割り竹形木棺）は〇・五×二・六メートル、掘り方二・一五×三・二メートルを測り副葬品はない。その他、第一主体の木棺から副葬品として、鏡式の年代が五世紀代前半に位置付けられる内行花文鏡（写真42―右）、第一〇主体から刀子片一本という程度、副葬品の少ないのがこの墓の特徴である。そして、墓と墓とが重なり合う現象が各遺跡で見られ、先に埋葬した墓の上にまた墓を壊して新しい墓を造っている。

組み合わせ 板石を箱形に組み合わせ、その上に石をか
式箱形石棺 ぶせるもので、底石のないのが一般的である

（写真41）。この形式の墓は、前述の組み合わせ式箱形木棺を石に置きかえたもので、木口石（こぐちいし）に対して、側石の方に長短があるのはその名残りであろう。また、長持形石棺や

家形石棺を納める形式とは異なり、土中に石棺を直接埋める行為は、小型の竪穴式石室も同様であり、木棺墓の流れをくむ葬法と理解してよいだろう。

この墓は、出石川右岸の田多地、口小野、宮内(坪井)などの土砂採取地に多く群在していたが、とどまることを知らない土取り事業に、手を打つ間もなく壊されていた。今日においても切り立った尾根上に側石と蓋石がコの字形に露出しているところがある。

代表的な石棺の例として、下安良Ⅱ号棺、Ⅲ号棺、田多地三号墳、五号墳、小野小学校裏山古墳などがあげられる。下安良古墳は、城山の突端部に設けられた墳丘の中に、三基の石棺を埋葬していた。Ⅰ号棺は既に消滅しており、Ⅱ号棺は陰石(かげいし)を用い、二枚の木口石と六枚の側石とによって組み合わせたもので、二枚の側石は、ほぞ状に切り込み、組み合わせている。蓋石には三枚の板石を用い、さらにその上を薄い板石で覆うというものであった。棺内は一・五三×〇・三五メートルである。棺内には朱に染まった完全な頭骨と石枕、四獣鏡、短剣と若干の骨が採集された。

Ⅲ号棺はⅡ号棺同様、二枚の木口石と六枚の側石、五〜六枚の蓋石で組み立てられた組み合わせ式箱形石棺で、棺内は一・五六×〇・二七メートルである。棺内からは、完全な頭骨と石枕、鉄鏃が出土した。築造年代は、封土出土の須恵器の細片から見て五世紀の中ごろ以後であろう。

銅鏡を持

当町は銅鏡の出土の多い所で、今までに四面の銅鏡が福居箱根山古墳三号墳(変形四獣鏡)、下古墳 安良古墳(四獣鏡)、田多地三号墳一号墓(内行花文鏡)、鶏塚古墳(乳文鏡)から見付かっている。

この銅鏡の出土状況等については各項で触れているのでここでは省略する。

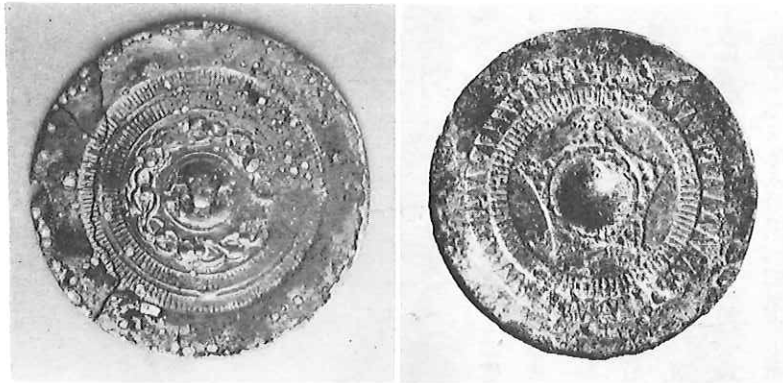


写真 42 銅鏡 (左)箱根山古墳出土 (右)田多地3号墳第1主体出土

箱根山古墳例は、面径九・二センチメートルを測り、八個の珠文の中に鎖状に変形した文様を描き出している(写真42―左)。埋葬形態は不明、瑪瑙製の勾玉が共伴している。下安良古墳は四個の珠文の中に、形の崩れた神獸を四匹鑄出したもので、外区には鋸歯文帯をもっている(巻頭図版)。田多地3号墳第一主体は、直径五・六センチメートル、五弧の内行花文(写真42―右)を鑄出したものである。このように町内の出土鏡は、鏡式こそ異なるが、横穴式石室の鶏塚古墳を除いて、福居・安良・田多地といった町の北部に点在すること、下安良古墳・田多地3号墳第一主体の組み合わせ式箱形石棺から出土していることなど、共通する分布や形式は、何を意味しているのであろうか。鏡式等から推論して、五世紀代に属するものと考えられる。

石枕

遺骸の頭部をのせるために作られた石製の枕は、出石町に多く、県下五例のうち、三例出土している(巻頭・写真43)。下安良古墳(二例)、三木区土田墓地内出土(一例)である。県下ではほかに、赤穂郡上郡町西の山一号、一〇号墳の二例がある。下安良古墳の組み合わせ式箱形石棺は、教育委員会

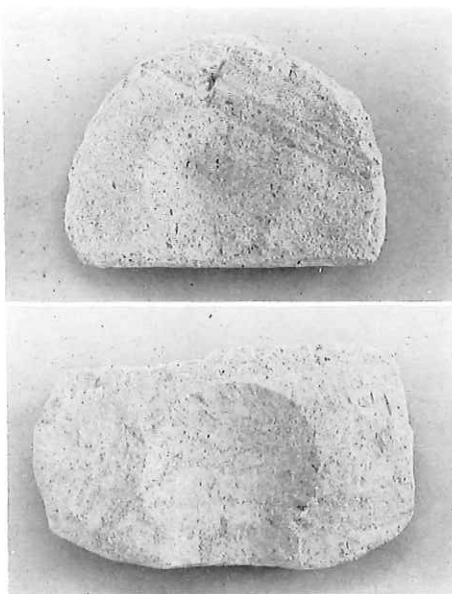


写真 43 石 枕
(上)土田墓地内出土 (下)下安良Ⅰ号石棺出土

の庭に移築して復元されているが、Ⅱ号棺と名付けた石棺の中からは、朱に染まった石枕と、四神鏡、短剣、若干の骨片、Ⅲ号棺にはノミの痕あとが生々しい石枕と、頭骨、鉄剣、鉄鏃が出土した。三木区土田の墓地内からは、組み合わせ式石棺と推測される石棺の中より出土している。

また、田多地三号墳、第六主体においては、組み合わせ式箱形石棺の中に、頭部から肩部にかけて丹彩した人骨が完全な形で

残り、その頭骸骨の下に板石を二枚敷いて、枕としていたことが発掘調査でわかった。これらの例から、出石を中心とする地域に、組み合わせ式箱形石棺内に石枕を用いるという葬法があったことが理解される。下安良古墳出土例、三木区土田出土例は、古墳時代中ごろ五世紀後半に属するものであろう。

石棺の石材

組み合わせ式箱形石棺の棺材には、豊岡市陰かげ産出の陰石を利用した石棺と、玄武岩を利用した石棺とがある。前者は、豊岡市陰から出る花崗岩質の砂岩、いわゆる陰石は、板状に節理する性質を利用して、組み合わせ式石棺を造るものである。この例には、田多地三号墳、豊岡市倉見山頂墳・正法寺七ツ塚八号墳・納屋ホーキ古墳、日高町羽根山古墳などで見付かっている。



写真 44 六方川河床遺跡 (田多地区)



写真 45 土器出土状態 (六方川河床遺跡)

後者は、豊岡市玄武洞などで見ることのできる玄武岩の節理を利用して棒状の割り石とするもので、例としては、田多地三号墳第六主体、城崎町稲荷裏山古墳などで発見されている。このような二石材六例の石棺が製作されていることは、既に石棺の棺材を切り出し、加工する石棺製作者集団とも呼ぶべき專業集団の存在を想像させる。年代としては、棺内の遺物等から、五世紀代から六世紀初頭までと推定される。

土師器

但馬においては、まだこの地方独自の土師器^{はじ}による型式編年が確立されていないので、畿内の様式論に基づく編年観を用い、いちおう第Ⅴ様式を弥生時代、古墳時代に布留式土器^{ふる}をあて、

庄内式土器を弥生時代と古墳時代の中間に置く。遺跡としては、田多地区の六方川河床遺跡、鳥居橋出土例がある(図33)。

六方川河床遺跡(写真44)は、六方川が奥小野区、口小野区を通り、山の南すそをめぐって田多地区の集落へ、そして、豊岡市へと流れる先端の川底内に位置する。一九八〇年(昭和五五)の河川改修工事中に発見され、弥生時代の凹石や敲石^{たきいし}をはじめ、古墳時代初頭の布

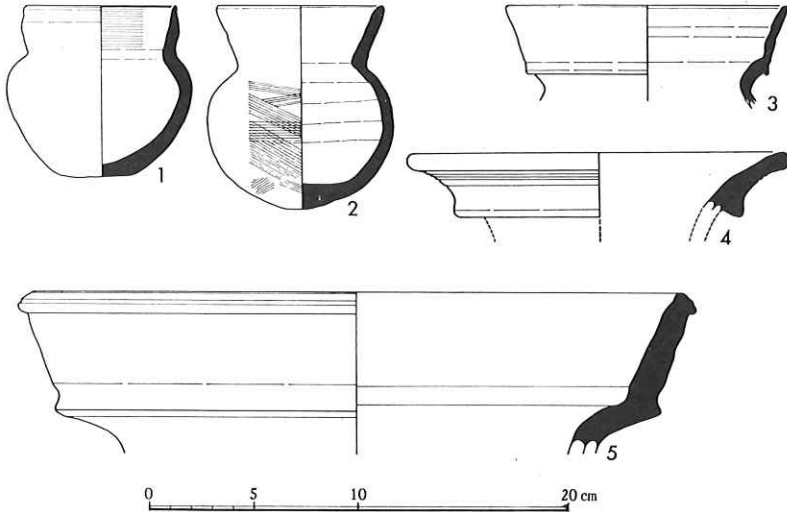


図 33 町内出土の土師器
 1. 六方川出土 2. 宮内上田出土 3. 4. 出石神社遺跡出土 5. 口小野出土

留式並行の時期に使用された土器、壺、カメ、高杯、器台といった土器が数多く出土した(写真45・46)。この遺跡は山麓に位置することから、かつて自然の微高地上に営まれた遺跡であり、遺跡の上を川が新しく流れるようになったため出現したものと理解される。

須恵器

須恵器は畿内では、五世紀に入って大阪府南部の陶邑すえいちを中心として、朝



写真 46 壺形土器(六方川河床遺跡出土)

鮮からの工人の渡来により須恵器の製作、焼成技術の導入によって生産を開始したとされている。但馬では、五世紀末から六世紀初頭には確実に、まず竹野町鬼神谷おしんだに古窯跡で生産が開始された。

出石町には、その須恵器を生産した工場の窯跡はまだ見付かかっていない。けれども、多数の須恵器が、小野小学校裏山(図34)を始めとして、副葬品として埋葬されており、器種には、杯身、杯蓋、高杯、壺、カメ、甗はそなどがある。最初に作られたころのものは墓に埋葬する土器であったが、次第に日常容器の土師器と共に使われるようになる。小野小学校裏山からは、土取りによって壊された古墳の中から、袋部をもつ鉄斧、ヤリガンナと共につまみをもつ杯蓋と、別の所から身と蓋とが滑石製の勾玉と共伴していた。須恵器の型式編年から、五世紀後半に年代を求められる程の古いものである。

六世紀代の須恵器は、横穴式石室の盛行によって大量に生産されたとみえ、宮内区の出石精和園裏山等の各群集墳から出土している。初期のころの杯・杯蓋は器面の稜線が明確であるが、次第に筒形はこがたの器形から稜線が丸みを帯び、器形も崩れていく傾向にある。また甗は首の部分が上方に伸び長頸になり、体部や頸部に装飾を施している。そして、七世紀に入ると、下坂の三基の地下式横穴に示されるような、五世紀の須恵器とは比較にならない程、器形も小さく、蓋と身とが逆転し、蓋の方にかえりをもうけ、その頂部に宝珠形のつまみをつけるようになり、杯身も碗状を呈するようになる。

古墳時代から 古墳時代約三五〇年間にわたる出石町の歴史は、長持形石棺をもつ古墳に代表されるこの新しい時代へ 地方の絶対的な権力者が君臨する四、五世紀と、横穴式石室に葬られる人々が、力をつけ

ていく六世紀以後とに分けて考えることができ、その後、出石町あるいは、北但馬を中心とする地方におけ

第4節 古墳に埋葬された人々

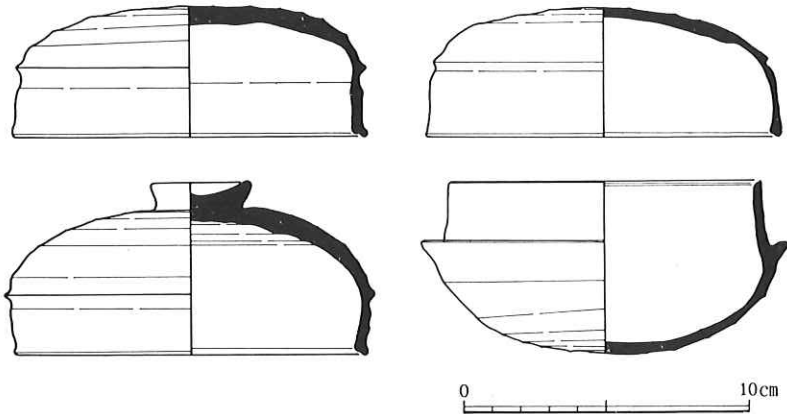


図 34 町内出土の須恵器 (小野小学校裏山出土)

る権力体制は、神をまつる出石神社、仏教をひろめる国分寺、あるいは国府などの、中央集権の国家機構の中に吸収されていたと思われる。それに対して、当時の民衆は社会の組織の中にはめ込まれ、一つの歯車と化していったことだろう。それは奈良・平安時代を迎えると、国家の体制の中がちりと組み込まれることとなっていくことになる。